

住・まちづくりフォーラム かわら版

ニューズレター第15号 2003年4月11日



特集：第15回住教育フォーラム
お父さんたちの子育て・まち育て
- 総合的な学習の可能性を拓く -

財団法人 住宅総合研究財団

15

目次

開催記録	… 2
趣旨説明 奈須正裕	… 3
講演 1：汐見稔幸	… 4
講演 2：岸裕司	… 10
全体討論	… 16
延藤委員長まとめ	… 28

第 15 回住教育フォーラム開催記録

テーマ：「お父さんたちの子育て・まち育て - 総合的な学習の可能性を拓く - 」

日 時：2002 年 10 月 6 日(日)13:00～17:00

会 場：建築会館会議室（港区芝）

講 師：汐見 稔幸（東京大学大学院教育学研究科教授）

岸 裕司（秋津コミュニティ顧問、学校と地域の融合教育研究会副会長）

参加者：建築・教育・まちづくりなどの研究者・実務者、学生、市民活動グループメンバーなど 46 名

企 画：住教育委員会

委員長 延藤 安弘（千葉大学工学部教授）

委 員 小澤紀美子（東京学芸大学教育学部教授）

木下 勇（千葉大学園芸学部助教授）

町田万里子（筑波大学附属小学校教諭）

細田 洋子（建築と子どもたちネットワーク仙台代表）

奈須 正裕（立教大学文学部教授）

* 所属役職は開催当時



表・裏表紙カット：町田万里子

編集・文責：住教育委員会 事務局 永田・平井

お父さんたちの子育て・まち育て - 総合的な学習の可能性を拓く -



(財)住宅総合研究財団住教育委員会委員
奈須 正裕 (立教大学文学部教授)

<趣旨説明>

総合的な学習で学校と地域が大きく変わる

こんにちは。今日の企画のモチーフをお話します。今年度から学校では、新しい学習指導要領が動き出し、指導要録も改定されて非常に大きな動きが起っています。その中で、小学校では年間105~110時間、4年間で430時間に及ぶ「総合的な学習の時間」がスタートしました。これは、学習指導要領に細かい記載もなければ教科書もないという時間です。つまり、これまで文部科学省が、何をどうやるかを細かく決め、教科書が供給されてきた学校教育が、いま大きく変わろうとしているのです。各学校、各地域で教育の内容や活動を開発して実施してほしいというものです。これは、ある意味では、本来的な形に教育が回帰しようとしているとも言えるのではないかと考えております。もともと子どもを育てる権利、あるいは義務は地域のすべての人にあるわけで、学校は、地域や親と連携しながら子育てをしていく地域の1つのセンターだった。それがこの国では、学校教育を天下りの構造で下ろしてきていた。その意味で学校は、地域にある治外法権の領域だったのかもしれないと思うわけです。それがいま大きく変わろうとしているのです。

ところが、その動きに対していろいろな所から批判の声も出ています。学力低下の動きをはじめ、「総合学習は死んだ」という『AERA』の特集号もありました。そこにおいて教師はどうすればいいのだろうか、あるいは教師と連携して子育てをやっていく親や地域はどうあればいいのだろうか、ということが重要な問題になってくるだろうと思っています。そういう中で今日、この企画にいたしました。「総合的な学習の時間」(以下、総合的な学習)が生まれ、学校の位置づけが相対的に変化したことによって地域との関係が大きく変わってきた。もう一度地域と学校の関係、そこにおける親や地域の人々の動きを問題にしたいということです。

先進的でパワフルな秋津コミュニティの事例

今日は、先進的でパワフルな動きをしてきた習志野の秋津小学校の事例を核にしながら、同じような意図を持

ち、別な形や景色を持っている事例、あるいは取組み、そこにかかわる人々の思いといったことを位置づけながら、ある図式が描ければいいと思っています。

秋津コミュニティを先導してこられた岸さんに事例を報告をしていただき、改めてこの時期における秋津の実践の意味を位置づけ直していただきたいと考えております。

いま、総合的な学習をどうとらえるか

また、秋津ももちろんですが、他のいろいろな地域における実践を指導というよりは連帯してこられた汐見さんに来ていただいております。汐見さんには多様な実践をご紹介いただいたとき、いまの時期における意味を理論的にご紹介いただきたいと考えております。

今日会場には、各地で取組まれている方、また、そういったことに強い関心をお持ちの方が多いと思います。さまざまな立場から、一緒に考えていきたいと思っています。可能な限り建設的な方向で5時までの時間を過ごしたいと思っています。

講師のお2人を簡単にご紹介申し上げます。汐見稔幸さんは、東京大学の教授でいらっしゃいます。私が東大の院生だったときもいらした先生なのですが、ただ私が真面目に学問っぽい学問をやっていた当時は何をしておられるのかよく分からない先生でした。学校に出入りしたり、こうやって住総研などとかかわってフィールドで仕事をしていますと、逆にリアルによく分かるし、一体学問というのは何だろうということを思わされるような先生です。実は、直接お会いするのは初めてなので、改めての新しい出会いが出来ることを私自身も楽しみにしております。

岸裕司さんは、秋津コミュニティ顧問で、秋津の実践を当時の宮崎校長と一緒に進めてこられた中心人物です。今日も生き生きとした語り口で実践をご紹介していただき、その実践の背後にある意味ということと一緒に探る糸口を与えていただきたいと思っています。よろしくお願いたします。

<講演 1>

学校と地域の境目を解く

- 子どもが生き生きする総合的な学習の可能性 -



しおみ としゆき
汐見 稔幸

(東京大学大学院教育学研究科教授)

教育は社会づくり、まちづくり

いま奈須さんからの確かな紹介があったと思います。大学で私は一体何をしているのか全然分からないと。いわゆるアカデミックな学者スタイルの学問に対してどこか反発があって、そういうのはやりたくないという気持ちでやってきました。

私は、教育の問題は結局、どんな社会をつくるのかというところに帰着するのだと思っています。社会がどんどんおかしくなってくるような時代に、子どもを育てるという営みで苦しんでいる親たちのいる現場に向向いて、さまざまな親と無数に出会ってきて、その場で一緒に考えるということをやってきました。それと同時に、私がいるときは何とかなれるけれども、いなくなったらまた元に戻ってしまうというような形ではないかわり方をも模索してきたのです。その中間的な結論は、教育学は、つまるところまちづくりであり、社会づくりなのだという思いです。そういうことを考えてきた人間が今日のテーマの「総合的な学習」をどう考えているかということをお話させていただきます。

総合的な学習をめぐる現場が振り回されている

個人的には、総合的な学習はうまくやるとすごく面白いけれども、教師の情熱と力が相当いると思っています。だけど、これをやりきれなくなったなら日本の教育は変わるな、という思いがあって、10年ぐらいは模索が続くのだろうと思っていたのです。ですが、始まる前に、総合的な学習はどこへ行ったかというような話になってきた。文部科学省で熱心に進めてきた人たちが異動させられてしまい、逆に宿題をもっと出せとか、習熟度別のクラスをつくってもっと「学力」を高めろというような動きになってきている。現場の先生は、それに振り回されているわけです。自分が受けてきたこともないような、まだ形も定かにならない総合的な学習をやれといわれて、大変だと思って、それなりに準備をしてきて、さあやろうとしたら総合的な学習はどこかに行き、今度は基礎学力だという。いま現場は揺さぶられている。そういう思いがあって、なぜいま総合的な学習が必要なのかとい

うことについて原理的なお話を最初にさせていただきます。

学校は教育内容を借りてこないと成立しない

学校は、もともとどこから教育すべき内容を借りてこないと成立しない特別な教育の場です。教育というのは、先生を求め、弟子になって育ててもらうことを依頼して成立するのが本来の形なのですが、学校は全く違う。教師も同じように、非常に特殊な職業です。長い人類の歴史にはずっと教育という営みはあるのですが、基本は職人に丁稚奉公して入るとか、親に農業のやり方を教えてもらうというやり方で、教える人に伝えたい価値とか内容が備わっていて、その人の持っている文化性を教育内容にするという関係で成立するわけです。けれども、学校の先生というのはちがう。教える内容についての専門性を持っているわけではなく、それはどこから借りてくるわけです。教師は内容の専門家でなく、教えることの専門家なのです。だからいつも教える内容を自分でも学ばなければいけない。これまでは、大体教える先生方が大学で勉強してきたことや、国が教える内容だと決めたことを、なんとか子どもに分かるような形で教えていけば、学校という所は成立したわけです。

こうした方式を支えていた考え方があるわけです。学者たちが明らかにした高度な知識があって、その高度な知識を工夫して分解し易いものから系統的に教えていけば誰にも高度な認識力が身に付く。その中心に知識の役割があるというものです。これは啓蒙主義と総称できるもので、その知識を上手に教えられるのが教師だったわけです。

普通の学校は、特定の職業準備のための教育をするわけではありません。けれども人々は何らかの職業に就くわけで、職業に就く限り、異なる職業の人が自由に交わることはほとんどなくなってしまいます。そこで、さまざまな職業に就く人々を精神的に結びつけるものが必要になるのですが、そのための知的な財を教養といってきたのです。ですから、啓蒙主義は教養主義ともいえることができると思います。これまでの学校は、啓蒙的、教養

的なものを中心として教えようとしてきたのです。それで100年ぐらいやってきたわけです。

これまでの学校教育を成り立たせていた4つの前提

実はこうした方式の教育のやり方が成立していた背景には隠れた前提がありました。それを4点だけ指摘したいと思います。

1つ目は、啓蒙主義が前提としたような、世の中を生きていくときに必要な高尚な価値のある知識というのは、学校にこそある。学校に行かないと手に入らない。それは家庭の中だとか地域の生活の中で得られるというものではないということです。学校への知的信頼感とでもいえるものがそれなりにあるということです。

2つ目は、啓蒙主義はこの知識を学んで覚えておけば、社会に出たときの助けになるということなのですが、こういうことが言えるということは、裏を返せば、社会に大きな変化や流動性が相対的に少なかったということです。社会がどんどん変化していくときには、学んだ段階と社会に出た段階で5年、10年ずれるわけで、学校で学んだ知識は古い！ということがいつでも起こりえます。そういうことがない社会変化の緩やかさということが前提です。

3つ目は、特に日本社会の特徴だと思うのですが、国民の大部分がサラリーマンを目指したということです。サラリーマンというのは、おたくの会社に入りたい、という仕事をするかについては会社が決めて結構、という特殊な仕事ぶりの人間です。職人と対極にあるところがある。ですから、サラリーマンになる人間は、会社でどこに回されたとしても私はやれるのだという証を立てて入らなければいけない。つまり何でもこなせるという証明が必要なのですが、それは勉強でいうと理科系も文科系も苦手なくなんでも一応こなせる、その証拠に平均値＝偏差値がこんなに高いでしょう、ほら、ということだったわけです。苦手科目をなくすという言い方をよくしますが、これは教育的に見たらおかしい話で、人間は苦手があるのは当たり前で、それが人間らしいところといってよく、俺は数学はあまり得意ではないけれども、絵を描かせたら人に負けないものがあるよ、というのがむしろ自然なのです。サラリーマン社会では、理系も文科系も、苦手科目をまずなくしてとやって全体を平均的にこなす人間をたくさん生み出します。できあがる人間はやはり平均的になります。こういう特殊な人間形成の仕方が通用したのは、日本の雇用システムが背景にあったからです。

学びによって自己肯定感が得られるか

4つ目は、なかなか表現しにくいのですが、学びが疎外感を生み出す可能性が相対的に低かったとでもいうこ

プロフィール

1947年大阪府生まれ。東京大学教育学部卒、同大学院博士課程修了。専門は教育学、子どもの発達的人間学(教育人間学)、特にことばと人間形成。教育人間学の応用部門として育児や保育を取り上げているが、それだけでなく、育児や保育を重要な柱として位置づけた教育学をつくり出したいと願っている。育児の実際にかかわってきて、その体験から父親の育児参加を呼びかけている。『父子手帳』を出版したのもそうした動機から。育児問題に感心を広げる中で現代の女性、男性の生き方とその関係のあり方、家族問題などについても関心を持つようになっていく。自分の家族をひとつの作品と考えていて、それぞれが自立していくことをどう支え合うのかを模索している。

とです。学ぶということを通じて身に付くものは、知識だけではありません。学んだ結果、自分と他者と世界がよりよく見えてきて、生き方がしゃんとしてくるということが大事なのです。別の言い方をしますと、学ぶことによって自分がどこにいるのかが見えたり、自分のちっぽけさが見えると同時にその中で一生懸命生きている自分というものを深く肯定できるようになったりしなければいけないわけです。これを自尊感情とか自己肯定感と言うとすると、学びには自尊感情や自己肯定感の育ちが伴わなければいけない。でないと、学ぶことがうぬぼれになったり、人と人を切り離したりすることから自由ではなくなるのです。

これまでは、歴史がこういう方向に動いていくのではないかと、その歴史に自分が参入できれば自分は肯定できるのではないかとということで、世界のなかでの自己がまだ見えやすかったかもしれません。また、遊びの世界や地域の中で、この遊びは俺が作ったのだ、この友達は俺がつくったのだなどと自分を肯定できるチャンスもたくさんあったわけです。ですから、学校で、自分で選んだわけでもなくて、自分で解き方を発見したわけではなくて、先生が教えてくれたのをただ丸暗記しているだけだったとしても、そのことによって学ぶということの疎外感を強く感じることはあまりありませんでした。しかし、この条件が欠けると、学びが競争になったりして似て非なるものになる。啓蒙主義の教育には、そういうことがあまりないということが隠された条件として入っていたように思うのです。

問題に出くわした時、どう対処できるかが重要

いまの申し上げた4つの前提のように、これまでの啓蒙主義的・教養主義的な学習を支えていた背景の論理が前提的であったのですが、これらがいまごとごとく崩れてきているわけです。

まず第一に、知識は学校にあるとは限らない。テレビ、ビデオ、ラジオ、雑誌、電話、インターネットといったものから膨大な情報が降り注がれているわけです。学校の知識というのは、いつもふるいにかけられた後のもの

ですから、リアルタイムで届いてくる知識から見たらずれていたり、バイアスがかかっていたりする。いろいろな所で起こっている問題がリアルタイムで情報として入ってきて、知りたいという領域が地球化してきている中でも、これを知っていたら自分はどう将来判断したらいいかがたいたい分かるというような知識が学校にあるかといったら、そうとは限らないわけです。一生学び続けなければいけないかもしれない社会にでていくのに必要なのは、むしろ学びたいという気持ちの方がかもしれません。

2つ目に、社会の流動性と変容がものすごいスピードで起こってきていますので、学校でこれだけを学んでおけば、社会に出ても何とか自分を失わずにいろいろなことが判断していけるというような知識を手に入れることは非常に難しくなっている。社会で解決できていないけれども、きちっとした見解を持っていないとうまく生きられない問題が山積しています。環境問題、人口問題、家族問題、要するにいまの社会で文明にかかわっているような問題というのはすべてそうです。解答や結論はない。むしろみんなでつくっていかねばならないことばかり。そういう社会に出ていくのですから、私はこう思うということが言えることが大事で、個々の知識の記憶が必要とは限らないのです。これからはどんな田舎でも、世界でいちばんはやっているスーパーストアが入ってくるとか、世界に名だたる窃盗団が襲ってくるというようなこともおこる時代です。そういう時代ですから、これさえ覚えておけば社会でうまく生きられるということではなくて、絶えず出てくる問題に対して、私はこう考えるという意見を出し、絶えずディスカッションし、合意を作り直し、自分を作り直し、ということをやっていかなければ生きていけない。将来、問題に出くわした時、それを考える面白さだとか、考えるときにどういふうにして知識を手に入れるかだとか、どうやって相手の意見を評価しながら反論するかというディスカッションメソッドだとか、そういうことのほうがむしろ訓練としては大事になってくるのです。

3つ目の前提もそうです。どこに回されても大丈夫というような、表面的であってもいろいろな分野の勉強を要領よくやっていく。これまでのサラリーマンに必要なだったのは、限られた時間の中で与えられたテーマをできるだけ要領よくこなすといった要領知。企業の人事担当の人に、なぜ東大生を採るのですか、ということを書いて回って卒論を書いた者がいまして、そのときの結論は、専門の勉強はいらぬというのがほとんどでした。彼らは、あれだけの短い受験準備の中で最も要領よくマスターしてきた人間で、その要領を買っているのだと。だから、要領が大事だという仕事が無くなったなら東大生はあまり役に立たないです。

21世紀は、新職人主義の時代

しかし今、その辺も流動化して、変わってきていますし、変わらなければいけないと思っています。私は、21世紀は新職人主義の時代にという言い方をしています。本物の文化だとか本物にこだわって、それを生み出す力を持つ国にしなければいけないと考えているのです。日本が明治期に国を開いた後100年前後の間にヨーロッパやアメリカの経済水準に何とか追いついた。なぜそんなことができたのか。実は、それは日本人がかなりの昔から大事にしてきた庶民の中にある職人氣質だったと思うのです。

私は堺の人間ですが、例えば鉄砲が室町の末期に日本に入ってきたときに、堺の商人たちは、それを見て瞬く間に模倣して、元のオリジナルより立派なものを作ってしまった。そのときの職人たちの鉄砲を見たときの驚きを、いろいろ想像できる。すごいもの作りやがってと。だけど、彼らは、ちくしょうと思って瞬く間にそれをマスターして元のものよりも良いものを作った。鉄砲の穴を開けて、弾がまっすぐ飛ぶためには非常に工夫がいるわけです。堺は世界でも最も自転車の生産の盛んな町ですけれども、実は、鉄砲の筒を作る技術が自転車のフレームを作る技術に応用されているのだそうです。これはすごいと思って、俺たちも作ってみたいというあこがれを持つ、そして、もっと良いものを作る。これは職人氣質です。この気質が庶民に強くあって彼らが工場労働者になってもそれを見事に発揮した。それが近代化の秘訣だったのです。

テレビが日本で始まったとき、高く金持ちしか買えなかったのです。だけど、僕の親父は、俺が作ってやるというパーツを買ってきて、仕事から帰っていつもはんだごてでやっていました。1カ月たったら出来上がって、試験期間として1週間ほどわが家で見ると、その期間だけわが家にはテレビがあって、隣近所の子がみんな見にきました。納品してしばらくすると故障して戻ってくる。戻ってきたらまたわが家で見られる。それを聞きつけて近所の人が、うちも作ってくれという形で、親父が作ったのが60台。余った部品がいっぱいあったので、それでわが家のテレビを組み立てたのです。だから、わが家のテレビはカバーがなくてブラウン管が丸出しで、その当時からカラ(空)テレビ、カラーテレビといっていました。

親父は、学歴でいうと小学校しか出てない。もともと堺にある料理屋の息子なので、小学校を出て割烹料理の板前をやっていたのですが、それがいやでいやでしようがないといって飛び出してしまった。それで自分の好きなラジオ作りとかやりたいということでレコード会社の録音技師になって、それで一生を終わるのですけれども、

五味康祐という作家が、日本でこの人に任せたら絶対大丈夫という録音技師が1人だけいると書いて、親父のことを書いていることを、僕は後で知ってびっくりしたことがあります。

日本的なよさ、職人文化的な伝統を見失ってしまった

そういう職人氣質の人間がたくさんいるわけです。何かを見たときに、ちくしょう、俺も作ってみたい。損得勘定抜きで、もっと良いものを作りたい、本物を作りたいというあこがれを持っていた人たちがたくさんいた。それが農民の世界にもあった。農民たちが昔からあこがれてきたのは、何でも自分で作るということです。何でも自分で作る万能人のことを「百姓」というのです。江戸幕府で軽蔑語になりましたけれども、もともとはルネサンスの人間像と同じでホモ・ユニベルシタスです。すべてのものを自分で作り出せる人間。だから、ガリレオ・ガリレイとかダビンチのような人間を「百姓」という語で表したのです。私の友人に「百姓」になりたいという人がいます。とにかく醤油も味噌も家も全部自分で作るというのが理想なのだ。でも、できないと言っていました。昔のやつは偉かったと。そういう文化を日本ではすごく大事にしてきたわけです。石ではなくて木の文化ですから、すぐなくなってしまう中で伝えるのも大変だったと思うのです。

私たちは、戦後の豊かさ志向の文化の中で、大量生産方式の機械文明が人間を豊かにするのだと思いこんできました。その反面で、明治以前に持っていたような、よいものにこだわるとか、粹とか通とかにこだわる、職人文化にこだわるとか、そういう世界というものをどんどん見失ってしまった。以前は遊びだって手作りで作っていたわけです。しかし、遊びを作っている暇があったら塾へ行って偏差値を上げる練習をしろ、というようになったときから、職人文化的なものの伝統を伝えることができなくなってきたと思うのです。いま、日本の経済がうまくいかなかったと書いていますけれども、僕は、簡単に克服できるとは思わない。なぜかという、次の新しいものを職人氣質をもった若者たちが「年寄り、お前ら何やっているのだ。そこをどけ。俺たちが代わってやるから」と出てこなければ社会が革新されないのに、そういう人たちをこの30~40年育ててこなかったからです。つげは大きいと思っているのです。

本物をビビッと感じる、体験する機会が大切

私は日本という国にこだわる必要はないと思っている人間ですが、この地球を支えていくための新しい職人を世界中でたくさん育てなければ21世紀はないと思っています。地位とか名誉とか金ではない、地球人を上手に共生させるような本物を目指す志向性をもった人間です。

そう考えたらサラリーマン志向的な教育というのは駄目で、それよりも子どものころから、何か本物を持って生きている人に会わせて、子どもが幼心にビビッと感じて、すごいとか、面白いとか、こんな生き方があるのだとか、そういうことをいろいろな場で体験させてやるという方が教育としては大事になってきたような気がする。それがすぐに生きるかどうか分からない。だけど、こういう世界があるのだ、すごいと感じることを教育は重視しなければ駄目だと思うのです。

四つ目に、先ほど言った自己肯定感というものが高まらないと学ぶことにならないということはどうか。いまは、これは俺が作ったものだということをちゃんと残すことは本当に難しくなって、何をやっても誰かが用意したものの上に歩いている。だから、歴史を自分で作っている実感もないと思うのです。ですから、先生がすべてを用意して、教材を準備して、そのとおりやっくらん、ほらできたでしょ、というふうなことをやっても、教師は満足するかもしれないけれども、子どものほうは、これは俺が作ったのだ、という実感をますますなくしてしまうので、逆効果だと思うのです。

教育は自分探し応援団

自分たちの町を散歩したくなるような町にするためにはどうしたらいいか考えてみよう、というテーマを出して、ここにすてきなベンチを置いてみようか、というようにことをみんなでワイワイやって、具体化する。そうやって、これは僕らがやったのだ、自分たちは歴史に参加しているのだという実感と肯定感を大切に。自分が学習の主人としてでんと存在しているという実感をどの場でもしっかりと持つ。それがこれからは絶対に要請されてくると思うのですが、これは、学習を学んだことの記憶に重点をおいてとらえる発想から、学んだことをそれぞれテーマに沿ってどう表現しているかということに重点を置いて評価するという発想に切り替えればよいということだと思うのです。これからは、どれだけ自分をきちんと表現したか、どれだけ現実にコミットしたかという、ひと言でいうと表現の教育のほうに重点が移っていかねばいけないと思うのです。

そういう意味で、学校はこれまでのような啓蒙主義と教養主義的な訓練の仕方から脱皮して、転換していかねばいけない時代だと思います。新しいテーマは、地球時代、グローバル時代の職人志向の人間形成ということです。子ども一人ひとりから見たら選択肢が非常に広がって、地球規模で選べる時代になってきています。でも、選択肢が広がっているということは、逆に、若い人にとっては、何を選んだら自分にぴったりなのかいつまでも分からないということでもあるわけです。

ですから、そういう時代に子どもたちが自分を上手に

探す応援をすることが教育になってくると思っています。だから、自分探し応援団というか、親もそうならなければいけないし、大人は皆そうでなければいけない。そのためには、こんな面白い世界があるとか、こんなすてきな文化があるとか、お前たちが解決しなければいけないこんな大事な問題があるとか、いろいろな形で本物を見せていかなければいけない。本物を見せて、同時にそこで夢を語らなければいけない。教育というのは、結局、最終的には、子どもと一緒に夢を語り、希望を紡いでいくことだと思うのです。地球環境問題はどんどん深刻になるぞ、大変だぞ、おまえら頑張りという教育をやるから世の中に出ていくのがだんだんいやになっていくのです。事実は伝えなければいけない。確かにそうなのだけれども、ここにこんなふうにして頑張っているやつがいるということを伝えることのほうがもっと大事なのです。要するに、大変だけれども、こうやったら変わるではないか、解決できるではないかという夢を語る。その語り部が教師だと思うのです。そういう意味で子どもたちの自分探しを応援していく教育。そのためにいろいろな文化の深みに触れ、本物に触れると同時に、そこで夢を語る。そういう体験をいっぱいしていかなければいけない。

価値を共有して固有な形で表現していく

知識は、どんな知識であったとしても自分1人では作れないのです。文化というのはすべてそうです。例えば、人類の歴史の中でいちばんたくさん読まれてきた書物というと、キリスト教の『聖書』や、孔子の『論語』、ソクラテスの言説を書いたプラトンの著作などが挙げられますが、ソクラテス、イエス、釈迦、孔子という4人の聖人をみたらよく分かるのですが、この4人は共通して自分では1字も書き残していないのです。

自分では1字も書き残さなかった人の書物がいちばん読まれてきているというのはどういうことかというところ、そこが文化の本質なのです。何かを作り出す人はいつでもいるのです。でも、それが残るためには、周りの人が、すごい、といわなければいけないのです。つまり、文化というのは、何かを作り出す人と、それを価値あるものとして評価する人の合作なのです。常にそうです。どんな優れた文学作品も、読む人がすごいと言わなければ文学作品にならないのです。文化というのは、誰がオリジナリティーがあったか分からないけれども、みんなでワイワイやって支え合って作っていくものなのです。そういう意味で文化は、本質的に時代の共有財産なのです。だから、子どもたちが文化を分かるためには、自分の持っているものを精いっぱい出して、他人とぶつかり合ったり、みんなで議論したり、協力しあってやっと分かってきたとか、俺が分かっていることをあいつに伝えたときにあいつが分かってくれたことがこんなにうれしかっ

たとか、共有する体験をもたなければいけない。それが文化の本質だからです。そういう意味で、知を共有していく。自分たちで探究しようという、そういう知のスタイルがこれからもっと大事になってくる。これも自己肯定感につながるものだと思うのです。そして、それを固有な形で表現する。表現の教育です。

自分を表現すると個性が光り出す

私の友人が学長をしているコンピューター専門の単科大学がありますが、そこに来る学生は、どこも行く大学がなかったからという人が多くて、学力もそんなに高いものが期待できない。オーソドックスに理論だとかを授業でやっていたらみんな寝てしまうというのです。それで、ミュージックでもアートでもいい、自分で表現したい世界を何か作ってみると。そういう教育に切り替えていったのです。最初は稚拙なものしかできない。けれども、稚拙なものでも、表現の教育に切り替えると、一人ひとりが全部個性的ですから、単純な評価はできないのです。お前は面白いものを作るなどか、まだ未熟だけれどもお前の発想にはキラッと光るものがあるというやり方になる。すると学生たちは、見事に自分を少しずつ少しずつ取り戻していくというのです。そして、あるところで自信を持ってくると本当に面白いものを作り始めるといえます。

その学長は、大学生は学力低下しているというのに対して反論を書きたいとずっと言っています。こちらが教えたものがどのくらい歩留まりしているかという教育をやっている限り、そういうのが得意なやつなんて限られているのだと。そうではなくて、自分が人生で得てきたものをベースに上手に表現していく。そのアートを身につけていったときにそれぞれが個性的に光り出す、そういう教育に、学校も変わっていかなければいけない。

大人が夢を語らないと若者は変わらない

そういう意味で、総合的な学習というのが、自分探しの場であり、文化の深みに触れる場であり、知識を自分で作り出したり共有したりしていく練習する場であったり、そして表現の力を鍛える場であるということにならなくてはならない。私は本来、総合的な学習こそが21世紀の学校教育の最も中心になってこなければいけない位置にあると思っています。総合的な学習の中身はさまざまあってよい。さまざまだから可能性が豊かなのです。でも、これをこなすには時間がかかるし、それなりの決意がいる。難しいけれども可能性と期待感の持てる教育なのです。ですが、残念ながらこれをうまく伸ばすことが励まされてなくて、急に尻すぼみになっている。その辺で闘っていかなければいけないと思っています。

学校は、21世紀バージョンにドラスチックに変わって

いかなければいけないんです。私は全国飛んで回って、小さな町の教育長さんとかとよく話をするのですが、そこで共通に言われることは、何とか若い人がこの町に残ってくれるような教育はないですかということです。

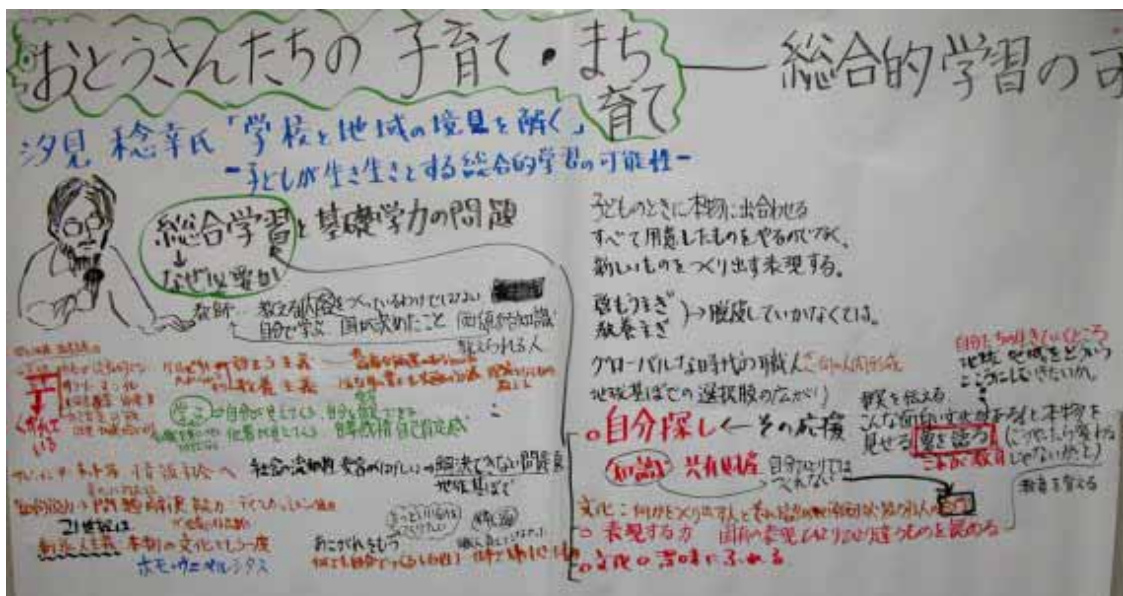
北海道のある酪農の町に行ったときに、人口2万4,000人ですけれども、毎年この町は400人ずつ人口が減っている、なぜだか分かりますかと訊かれました。町の高校の卒業生が毎年400人、その分が全部消えていくのです。酪農は365日休みがない。しかも大して利益にならない。だから、嫁さんが来ない。そういう所に残りたい若者なんか1人もいないのです。どうしたらいいのですかと。

私は、若者に自分の村や町に残ってもらおうと思ったら、まず日本という国に従属しているのをやめて、独立することから始めよう。その気概を持たない限り無理だ、という話をするのです。北海道と同じ面積、同じ人口でデンマークという国がちゃんと独立してやっている。それよりもっと資源が豊かな北海道が独立できないはずはないと。半分本気なのですが、そういう独立の気概がないと無理だと率直に思うのです。

もう一つは、この町に残ってもらいたかったら、例えばこの町を世界一の酪農の町にして、そしてここから世界中の酪農の町へ発信し、共同で何かを作り出そうという、そういう夢を大人が語らなければ駄目だと。大人がそういう夢を持たなければ若者がそうだと思うはずがない。そのために若い人をデンマークであろうがどこであ

ろうがどんどん派遣すると。俺たちの働いた税金はお前たちに費やすと。東京へ行ってよい。いつか勉強しても必ず戻ってきてここを世界一の酪農の町にしような、と真面目に町の人たちがみんな語り始めたら、若い人は少し変わるかもしれない。つまり、大人が夢を語らない限り若い人は変わらないと思うのです。これこそがいうところの総合学習なのではないかと思うのです。総合学習というのは、突き詰めると、町づくりから始まって、地域づくり、国づくり、地球づくりへの希望と夢、そしてそのための展望と意志を育てる教育なのです。だから子どもたちだけでできるわけがないし、教師だけでもできるものではない。子ども、教師、親、地域住民も地域づくり、地球づくりという点で総合される。

自分たちがこれから生きていく地球という星の将来、そして足場である自分たちの地域の将来が、どこでも深刻に問われ始めた。その帰趨が私たち一人ひとりにかかってきている。そういう原点になった、だからこそこういう学習をしなければいけない、こういうことを次の世代に伝えなければいけないのだということを明確にする。総合的な学習というのは、そうやって成立する学びだと思うのです。そういう意味で、教育は、まちづくりであり、社会づくりであり、社会の理想を描き合うことなのだということをはっきりさせた方がよい。そしてその突破口のようなことを総合的な学習にかけたい、というのが私の話です。



当日のファシリテーショングラフィックより

<講演2>

父親が輝くコミュニティを育む - 総合的な学習への創造的なアプローチ -



きし ゆうじ
岸 裕司

(秋津コミュニティ顧問, 学校と地域の融合教育研究会副会長)

学校は地域みんなが関わるコミュニティの真ん中

汐見さんが理論的なお話をされるだろうということを予想して、今日は、できるだけ具体的に何をやっているのかを見てもらおうと思ってきました。タイトルに、「父親が輝くコミュニティを育む」とありますが私は、「父親が」、ではなくて、「父親も輝くコミュニティを育む」と考えています。地域というのとコミュニティというのとどうも違うなと。地域は面積的な広がりと考えて、コミュニティと使うときには、そこで住んでいる人が自分たちの地域をこうしていきたいという意味をもっている、もちろん面積も含むわけですが、それがコミュニティという概念に近いと考えています。私が今日お話しする習志野市立秋津小学校区は、人口7,500人、約2,400戸です。赤ちゃんから高齢者、さらに身体的にも精神的にもハンディをお持ちの方、それら総体が輝くコミュニティ。その真ん中に秋津小学校という公立の学校がある。その学校が輝く、つまり、教職員が輝く、そこに通う子どもたちの元気な声が町の中に響いてくる。子ども自身が自主的に学校に行きたい。なぜかといえば、わくわくする学びがあるから。人類知的遺産の継承の場所が学校である。つまり、学校教育そのものを教員だけの仕事としないで、おじさん、おばさん、子どもさんのいない人、おじいちゃんやおばあちゃん、すべての人が学校に行ける。かかわれる。それが本来の学校だろうと思います。

今日は特にお父さんなので、お父さんたちというのはどうやって学校に寄りついていくのか。その辺りから入りたいと思います。1本目のビデオをお願いします。

(ビデオ開始)

休日の朝の小学校です。集まっているのは、40代、50代の、会社では課長や部長の顔を持つ人たちです。ここでは、名刺や肩書きは何の役にも立ちません。

千葉県習志野市の秋津地区は、新興の住宅地です。子どもの数は、10年ほど前の半分以下になりました。そこで、小学校では、使わなくなった4つの教室を地域活動の拠点にしてもらおうと開放しました。

教室をよりどころにしているのが、2年前に結成した父親たちのグループ秋津コミュニティです。来たいときに来てやりたいことができる自由な場所というのが活動のうたい文句です。

コミュニティが出来たきっかけは、PTAの10周年記念で造ったウサギ小屋でした。設計図は、1級建築士。屋根の鉄板は、鉄鋼商社の人。角材は、地元のお風呂屋さんの燃料になるはずだった古い材木を持ち寄りました。40人のお父さんが4カ月がかりで完成させたのです。

学校の裏庭で野菜を育てているサークル「うらの畑」です。窪田さんが中心になって3年前にこの場所を学校から借りました。窪田さんは、大手のアルミメーカーに勤めています。大阪に単身赴任しながらこの活動を続けているのです。残業に追われる一方で家族と離れた生活を重ねてきました。子ども2人が手がかからなくなったとき、転機が訪れました。妻が友人と一緒に趣味を深めていくのを見ているうち、仕事一途の生活に疑問が出てきたと語ります。

窪田 5、6年ごとに転勤しておったものですから、ちょっと慣れてきたな、と思うときにまた地域と離れてしまうのですから、根なし草みたいな感じがいつもして、初めのころはそれでよかったのですが、だんだん歳を取ってくると、このまま定年まで迎えて果たして自分に何が残るのかな、ということ考えたときに多少不安感が出てきて。

窪田さんは、どんなに忙しくても月に1度は大阪から帰ってきます。自由で満ち足りた自分と出会うためです。次に作るもののアイデアを出し合ったり、子どもの教育について意見を交わしたりとたどりついた地域の活動に意欲を燃やしています。

窪田 やはり気安さでしょうね。とにかく気のおけない仲間がいる。その一言に尽きるのではないかと思います。人が増えてくればくるほどいろいろなアイデアも出てくるし、それからやることの多分スケールも大きくなっていくと思うし。だから、どんどん自分の中で広がっていくのを感じる場所です。

(ビデオ終了)

お父さんの居場所づくり

今のビデオは1997年の映像で、窪田正さんは、私の次にPTA会長をされた方です。

PTA創立10周年記念のイベントで、飼育小屋づくりをしたきっかけは、お父さんの居場所づくりをしたいということでした。私も20年前に会社をつくって独立して、週休2日制でした。ほかのお父さんたちはどうしているかとお母さんたちに聞くと、いやいや接待ゴルフに行っているとか、家でごろごろしているとか、子どもと遊んでほしいのだけれども遊んでくれないのよねとか、

お母さんからお父さんに対するうらみ節がものすごいのです。週休2日になっても、お父さんに聞くと、2日間寝続けるというのも結構大変で、どこかへ出たい。だけど、子どもが小学校の中学年から中学生になると、ほかの友達と遊んだほうが楽しいからお父さんとは遊んでくれない。だから、お父さんが自分の子どもとかかわれる年数というのはそう長くはない。

その当時、お父さんたちをお母さんたちが表現すると、粗大ゴミ。もっとすごいのは、回収してくれない生ゴミと。お父さんたちが何とか有益な資源に変わらないものかなと。秋津がというのではなくて、社会全体の暗い部分、特に子どもたちとかかわる面での暗い部分は、ほとんどがばかなおやじたちだと。例えば、援助交際の少女を買うとか、麻薬を売っているとか。つまりばかなおやじたちは何とかしなければいけない。そのためには、麻薬よりも面白い遊びがあるぜ。援助交際するよりも面白いことがあるぜ。そういう具体的な例を地域社会、または自分の居住地域、寝る場所より暮らす場所、そういう転換をしなければならぬのではないかとPTAをやりながら思っていました。

Win&Win 双方にメリットが「融合の発想」

そこで、たまたま飼育小屋になったわけですが、「融合の発想」という発見がそのときありました。秋津地域というのは、一戸建も若干ありますが、低層・中層の団地群です。そうすると、家では小動物以外は飼えない。ですから、親の欲求としては、何とかウサギやニワトリを飼わせて、生き物と触れ合う体験をさせてあげたい。一方、親だけがそれを望んでいても、学校の教員が望まなければ飼育小屋づくりなどということではできないわけですが、先生に話をしてみたところ、来年から生活科が導入されるので、1、2年生に生き物を飼育するという領域があるから、新築の飼育小屋は是非欲しいと。できるならば遊びの広場のような、放し飼いして子どもと一緒に遊べるような囲いがあるような広場も欲しいと。地域が欲しがっていて先生も欲しがっている。これだと。つまり、両方がメリットを感じることを融合することが大切なのだ。PTAが寄付しようとしても、教員が欲しがらなければ、それは押しつけである。教員が欲しがり、保護者もメリットがあることしかやらないと秋津では決めてしまいました。

考えてみたら、ビジネス社会で当たり前にならなようなことをやっているのです。商社に勤めているお父さんが「Win&Win」と言っていたのですが、つまり、両方も勝つこと、これをなくしてビジネスは長く続かない。そのことを教員と保護者、または学校と地域社会を考えたときに関係性がどうもおかしいと。例えば、PTAは保護者と教職員の会なわけですが、大体保護者が教職員を

プロフィール

1952年東京生まれ。1980年東京湾の埋め立て地・習志野市秋津にまち誕生と同時に家族と転居。1986年から秋津小学校PTA会長を含む役員経験7年。以後小学校区の生涯学習の充実に努め現在に至る。学校と地域の融合教育研究会副会長 / 秋津コミュニティ顧問 / 秋津まちづくり会議理事（生涯学習担当） / 文部科学省「新しい学習環境の整備に関する調査研究委員会」委員（2001～2002年度） / 神奈川県「川崎市生涯学習推進懇話会」副座長委員（2002～2003年度）など。著書『学校を基地にお父さんのまちづくり-元気コミュニティ！秋津』（太郎次郎社）ほか

批判したりするわけです。そういうときにはやったのが、PTA、Tがなければパー（PA）なのだと。こういう会では駄目だと。会費を払う主体者同士にメリットを生む会にしなければいけないということで双方にメリットのあるさまざまなことをやってきました。

現在、秋津の学社融合の事例は16ぐらいあります。これらすべて学校教育が充実し、かつ参画する大人にもメリットがあると。その前提でしか我々は学校とかかわらない。そんなふうにして築き上げてきた総合的な学習の現在の例です（資料1）。

資料1 秋津コミュニティの学社融合事例（2002年9月現在）

学校おはなし会（全学年国語科）地域文庫サークルとの学社融合
田んぼ体験（5年生社会科）校庭に手づくりした田んぼでの学社融合
国際理解学習（3年生社会科）海外で活躍するボランティアとの学社融合
ピオトープづくりや環境学習（全学年多教科）校庭への自然環境の創生と観察
校内音楽会（全学年音楽科）秋津コミュニティの音楽系サークルとの学社融合
高齢者との触れ合い（1、2年生活科、6年特別活動）
学校と地域の大運動会（全学年体育科）
鈴虫を飼い高齢者に届ける（2年生活科）
栽培した花の種や苗の販売（2年生活科）
ケナフの栽培とハガキづくり（2、4年特別活動）
秋津っ子まつり（全学年児童会）
クラブ活動（4～6年特別活動）
大正琴（2年音楽科）
秋津まつりへの参画（全学年）地域主催まつりでの音楽発表
秋津小とまち誕生20周年の「調べ学習」（3年社会科）地域の方にインタビュー
竪穴式住居づくり（6年社会科）地域の方々とともに手づくり体験

そうすると、飼育小屋にかかわったら、学校って面白いね。面白いのだったらPTAもやったほうがいいよ。では、来年はPTAの会長をやるね、ということで窪田さんが会長を務めていきました。そんなふうにしてPTA会長は、スムーズに決まってくるようになりました。

お父さんたちを誘うときには、一本釣り作戦とか、奥さんと子どもと一緒にとか、場合によっては知っているお父さんに電話をしたり、家まで行ったりして周りからぎりぎり攻めていって参画させるアリ地獄作戦というものもあります。それから、飼育小屋を造ったときには、いまの子どもたちは、上棟式というのを見たことがないから、餅をまいたりお金をまいたりして遊ぼうと。そういうときにお父さんがたくさん引かかってくるので投網作戦といいますが、そんなふうに行っているイベントを考えながらやる。参加したら離さない。離さないためには、参画したお父さんに名前を書いてもらうのです。子どもの学年とクラス、そしてお父さんの名前。大体初めて参加するお父さんたちは、自分の子どものクラスが分かりません。何組だっけ。そういうときには、先輩の私たちは、できるだけばかにします。自分の子どものクラスも分からないのと。

つまり、そういう体験をしないとなかなか父親になれないのです。生んだだけでは親になれない。そういう時代だと思います。ですから、親になるための資質を磨くように周りから持っていくとなかなか父親になれない。名前を1回書いてもらうと、次のイベントのあるときに必ずチラシの上に、「誰々さん 最近お会いしてないのですけれども、あれの会も後でありますので、お顔を見たいです」とものすごく歯の浮くような一言を書いて、もちろん学校のイベントですから校長名とPTA会長名とかあって、子どもに配られるわけですが、あえて1枚ずつお父さんの名前を書いてポストに入れておくのです。そうすると、お父さんというのは、岸さんは僕の名前を覚えておいてくれた、誘ってくれた、と喜ぶのです。2回目に出てくると、本当に出てきてくれた、ありがとう、と言いながらあとは突き放すのです。

つまり、自分の足でやっていくということは、自主性がその人に付くわけです。そういう人を何人もつくっていくことによって、そのお父さんが今度リーダーになってきます。新しい人が来ると、自分が入ってくるものすごく緊張した気持ち、そして優しく迎えられたときの経験をしているものですから、新しく入ってくる人に対してものすごく優しくなってきます。そうやって多くの人をつくっていく。つくっていくためにはさまざまなサークルを作っていくわけですが、サークルのリーダーを一人ひとりつくっていく。これを多頭性と呼んでいます。1人が握りしめていると広がらないからできるだけたくさんの頭をつくっていく。そのサークルというのは、

やりたいもの何でもいいのだと。けども、公民館ではなくて、何でも学校でやる。そういう大人の姿を見て、子どもも、あんなおじちゃんになりたいと。こんなおばちゃんになりたい。いくつになっても一生懸命やる姿というのは美しいと、押しつけなくても子どもは勝手に考えてくれる。そんなふうになっています。

では、どういうことを具体的に学校教育の中で地域の人と一緒にやっているか。2本目のビデオで見ていただきます。これは汐見さんの解説です。

(ビデオ開始)

秋津小学校では、10年ほど前から地域の人が参加する学校づくりが進んでいます。4月中旬の土曜日、50人が集まりました。子どもを小学校に通わせている親だけではなく、30代から60代までの地域の人がいます。学校が募集したクラブ活動員と呼ばれる人たちが、小学4年生以上が必修で行うクラブ活動にボランティアとして参加します。活動の中で人生の先輩として子どもたちが学んでいくことはたくさんあると思います。

クラブ活動員は、希望すれば地域の人も誰かがなれます。これから1年間隔週の土曜日、クラブ活動に参加し、指導に当たります。この制度は、8年前、秋津のまちづくりを進めていた人々と学校が協議して始まりました。いまバドミントンやサッカー、料理や陶芸など10のクラブに活動員が参加しています。多くの小学校では、平日に行われるクラブ活動を秋津小学校では土曜日に行います。大人たちが参加しやすくするためです。住民が参加することで教師が1人で教えていたころに比べ、きめ細かい指導ができるようになりました。

将棋クラブには4人が参加しました。サラリーマンや定年退職した人たちが、4人とも去年から続けています。最初は軽い気持ちで始めた人もいますが、次第に子どもとの触れ合いが生まれ、いまではクラブに参加することが楽しみになっています。クラブ活動員の将棋の実力はさまざまです。中にはアマチュアの大会で優勝するほどの実力者もいます。また、子どもと一緒に実力を上げていこうと思って参加している人もいます。

去年辺りは、勝っては悪いな、と思っていたのだけれども、今日は本気になっています。いま負けると1年間の先生の資格がなくなってしまうから。

お父さんたちにも、優しく教えてくれるお父さん、負けてくれるお父さんもいる。だから、子どもたちも、気分が今日はこのお父さんと対戦したいな、また今度は強いお父さんとやりたいなと。そういうように使い分けしているのかな、そういうのがあります。いま19人いるのですけれども、個別には、1分ずつでも19分かかってしまうのですけれども、これだけいてくれると助かりますし、また私よりもうまく教えてくれるのかな、新鮮味もあるので、そういうところはすごく助かっています。

授業の中に地域の人が参加することもあります。生活科でお年寄りから話を聞いたり、国語で母親に読み聞かせをしてもらったりしています。

佐々木幸雄校長 人生の先輩としての地域の方に対する尊敬の念とか、それからあこがれとか、それから一生懸命生きていく姿から生きるということの意味を感じ取るとか、そういっ

たいわゆる心の成長が期待できます。

去年からは、地域の人々が教職員のためのパソコン教室を開いています。コンピューター関係の仕事をしている人たちがボランティアで講師を務めます。この日は、パソコンの苦手な教師にコードのつなぎ方から始めてパソコンの初歩を教えました。

参加した教師たちは、パソコンで写真入りのプリントを作り、子どもたちや保護者への連絡に使いたいと考えています。こうした活動を通して秋津小学校では、地域の人々と子ども、地域の人々と教師の間の信頼関係が育っています。

(ビデオ終了)

この4月から学校が完全週五日制になりました。先ほど見ていただいた土曜日のクラブ活動は、火曜日に移って、授業時数の縮減ということもあって月1回に減りました。去年は大人が65人登録していたのですが、今年は18人にまで減りました。困ったことはしめた、というのが秋津の発想です。

3年前に『学校を基地にお父さんのまちづくり - 元気コミュニティ！秋津』（太郎次郎社、1999年）という本を出しました。その中で、「学校週五日制ドンと来い」、「総合学習、屁のカップ」、「安心して老られる町」、「金をかけないまちづくり」、「寝る場所から生きる場所へ」と言いました。何で3年前にそんなことが言えたかということ、土曜日は先生の権利だから休んでいいですよ。だけど、体育館と校庭は貸してよね。地域で運営する総合型地域スポーツクラブというのをつくるから、ということで具体的に2年前に総合型地域スポーツクラブというのをスポーツ・リーダーが集まってつくってくれました。しかも中学校区までエリアを広げて行政のほうも、中学校区でモデルとしてやってくれということになりました。その1つを、第1、3、5土曜日の午前中運営してもらえないだろうかということでこの4月からトータル・スポーツという名称で、スポーツ系に関しては、地域が自主運営しています。

そうなると、クラブ活動よりもメリットがあるのです。なぜかという、クラブ活動というのは、4～6年生しか参加できません。ところが、トータル・スポーツになれば、幼児から高齢者まで一緒にできるわけですから、

地域にとっては、健康なまちづくりにもなって良いことだと。ですから、学校4日制でも、3日制でもかまわない。場合によっては、学校を我々が運営してもかまいません。今年から文部科学省のコミュニティ・スクールの3年間の研究指定にしてくれたので、やりたいことをやっていこうと考えています。

次に、子どもの数が減ったことによって出てきた部屋を地域がどんなふうに使っているのか。いわゆる目的外使用なのですが、国はここまで認めているということで次のビデオを見ていただきたいと思います。

(ビデオ開始)

このシャッターの向こう側の4つの教室が市民に開放されています。まるで公民館のように近所の人たちがここでさまざまなサークル活動を楽しんでいるのです。

岸 朝の9時から夜9時まで。

今日は大正琴なのです。練習の定例日なのです。

みんな楽しそうですね。子どもたちがこうやって自由に入っているのですね。

岸 そうです。いまは休み時間なので。こんな感じが日常的な光景です。

学校に来て練習するようになって何か変わったことというのがありますか。

お使いの途中で会ったら「おばさん、こんにちは」と言ってくれるし。

こっちは顔を忘れてるのに子どもさんたちというのは覚えてくださって、名前まで覚えてくださっているから。

外に出るとまた楽しいのです。子どもたちが泥んこ。

これは何ですか。庭ですか。

岸 これは併設する幼稚園の園庭になるのですが、この5月末に完成したピオトープといまして、自然観察園なのです。

これも造られたのですか。

岸 そうです。こういった池や田んぼとか自然が何もなかったのです。ないならみんなで造ろうということで、学校と地域と一緒に共同作業で造ってきました。

空き教室でのサークル活動、そして田んぼに井戸。新しい学校づくりがここで進められていました。

(ビデオ終了)



将棋クラブで地域のおじいちゃん
と子どもたちが将棋で「勝負！」



コミュニティールーム（余裕教室の地
域開放）で大正琴サークルのおば
ちゃんと触れ合う子どもたち



手づくりの「ごろごろとしょしつ」
で紙芝居を子どもたちに演じる地
域のおじいさん（元は保護者）

融合の発想でピオトープ

あのピオトープの設計をしたのは榎重善さんです。千葉大学延藤研究室の田中宏実さんにもいろいろ協力してもらっています。何でピオトープかという、先生たちに総合的な学習で何をやりたいかを聞いていると、福祉に関しては、秋津に特別養護老人ホームも出来て、福祉センターもあるのでさまざまにできるわけですが、中には、環境学習をやりたいという先生もいる。でも、埋立地のためにいわゆる自然がほとんどないのです。あっても浜まで行かなければならない。そういう中で5年の社会科には日本の稲作という単元があるので、できれば田んぼ体験をしたいとか、さまざまな意見が先生から出るわけです。それも実現していこうと。それと同時に5日制で年間165日が休校日なわけですから開校日が200日。そうすると、45%学校が開いてないわけです。45%は地域のコミュニティ・ガーデンとして使おうと。ピオトープが出来れば、周りでバーベキューとかさまざまな遊びをできる。地域にとってもメリットがある。先生にとっては、授業素材である。これも融合の発想で造るようになっていきました。

そうすると、先生は反対する理由がないのです。その延長で、部屋も空いたからいいですよ、ということで7年前の1995年から教育委員会に地域から要望して、もちろん校長の了解のもとにコミュニティ・ルームという部屋を確保することができました。現在、サークル数が40ぐらいで、大正琴のサークルもその1つです。おばあちゃんたちが弾いていた曲は、『森のクマさん』でした。最初は『荒城の月』とか、いかにも大正琴の音だな、という感じだったのですが、なぜ『森のクマさん』になるかという、子どもが来るようになるわけです。

学校の良いところは、子どもがいるということなのです。それとクーラーがないこともよくて、暑い日は窓を開けてしまう。窓を開けると、子どもたちの部屋も窓が開いていますから音が自然に漏れていってしまう。子どもたちの耳にも入ってくる。そうすると、あの音は何だろう。いままで聞いたことのない楽器だ。行ってみよう、ということで休み時間にやってくるわけです。「おばあちゃん、その楽器何」と聞くと、「大正琴よ。一緒に弾いてみる」ということでつかの間の交流が始まります。

そうすると、喜ぶのはおばあちゃんです。公民館ではこんなことない。冷暖房も完備、防音装置も付いているけど、子どもがいない。学校っていいな。コミュニティ・ルームをもっと使おうということで通ううちに、子どもの話を聞いた先生が、是非生活科で授業に出てください。年に1回の校内音楽会にも是非出てください。おそらく今年からは、中学校の学習指導要領が改定されて、日本の伝統楽器とかというのが音楽に入ってくるわけですから、当然大正琴のおばあちゃんや三味線のどんつくだ

とか、そういう方の出番が広がるわけです。そういう地域素材が、教員がわざわざ出かけていなくても、学校という施設を開くだけで向こうから飛び込んでくれます。そんなふうにしなごらおばあちゃんたちの出番も作られていくというふうになりました。

学校を自助、共助、最後に公助のまちづくりの拠点に

そのことから、改めて生涯学習社会を形成するということはどういうことなのか、ということがはっきりと分かってきました。いままでは、社会教育は学校の外でやってくださいということで、学校教育と接点がないのです。だけど、生涯学習社会をつくっていこうというのは、まさにオギヤーから墓場までなので、例えば今年の男性の平均寿命が79歳です。60歳で定年としても、その後20年も生きてしまうのです。つまり、自らが粗大ゴミに脱出しないと社会全体が大変なのです。だから、大体50近くなってくると、その後どうするのかということも何となく感じるのです。自分たちで創造していかなければいけない。その創造する1つの素材として学校があってもいいではないか。なぜならば、子どもがいない大人の人も含めて、小学校や中学校がすべての人の税金でまかなわれているわけですから、使わないときは私たちに貸してくださいと思います。

そうなってくると、いまはコミュニティ・スクール、さらにエコ・スクール、その次は防災スクールということになってきます。365日いつ駆けつけても自分の命と財産が守られる施設。これを誰が認定しているかという、と首長なのです。教育長ではないのです。だから、これからの学校のカギの管理は、教育委員会と共に首長部署が管理してもいいだろうと。場合によっては、6時になったら先生は帰ってください。次は社会教育が使います、というような考え方があってもおかしくないと思っています。

そして、何ととっても運営するのは、行政任せではなくて、自分たちが楽しむ、自分たちの宝の子ども、その子どもが通う学校も地域の宝なのだ。だから、自分たちで管理をしよう。まず自助、そして助け合っの共助、最後に公助のまちづくりというのも私たちのテーマになってきました。そんな延長で、現在、お父さんがどんなふうになってきつつあるのか。最後のビデオをお願いします。

自分自身が楽しいことを学校でやっているだけ

(ビデオ開始)

岸 何が楽しいかという、夕方、作業が終わると木くずを集めて、誰彼とはなくたき火が始まるのです。もちろん校長先生だとかさまざまな先生も間に入って、普段では話にくいような話も含めて大人同士の会話が、教職員とか父親であるとか

という壁を越えてできたことはものすごく楽しかったです。

参加しているサークルは全部で39。お父さん・お母さんたちが積極的に参加しています。

子どももだんだん大きくなると、うちにいる時間に誰ともしゃべらないで1日終わってしまうので、こういう所に行くといっぱいしゃべる。

サークルがあると、それぞれのスペシャリストがそれぞれの部屋にいるわけですよ。

そうですね。最初は素人でも、学んでいく過程で、卒業することないですから何年やってもいいわけです。10年やっていけば、最初は素人でも当然うまくなってしまいうわけです。そういう体験をご自分がなされると、全くの素人の子どもが来ると優しくなれるのです。お父さん自身が学んできた面白さが分かるから。そのこともものすごく大人自身がいくつになっても自分を高めていける。そういう経験ができるのではないかと思います。

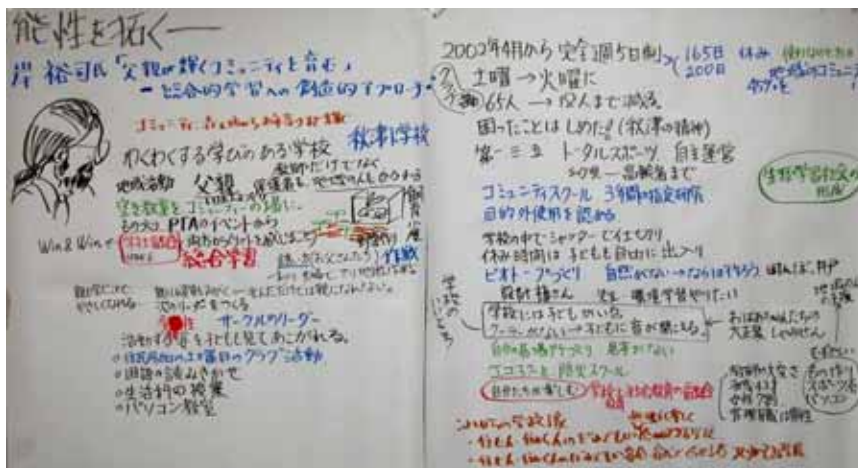
飼育小屋を造ったお父さんたちは、いまでも学校に必要なものを探しては週末に作業をしています。現在取り組んでいるのは、第3の飼育小屋。今度はなんと鉄筋製なのです。

別に地域のためというわけではなくて、ここでやっていると、当然子どものために造るわけですが、作業をしていたら子どもたちも寄ってきますし、なにせお父さんたちで集まるというのも楽しい。何よりうれしいのは、子どもたちが寄ってきてワイワイ・ガヤガヤで、お父さんが造ったんだよ、と言ってくれるのがいちばん楽しいです。

このようにお父さんとお母さんが自然と地域に溶け込む様子を見ると、大人と子どもが一緒になってもっと楽しめるような、そんな場所がもっともっと増えるといいと思いました。

(ビデオ終了)

最後にしゃべっていた方は、この4月からPTA会長になった立場昭彦さんです。あんなふうに分岐の楽しみで続けていると、「楽しいことをやっているのだからどこかでPTAをやらなければ駄目だよ」と言うので、「いや」とか言うのです。でも、3年ぐらい言い続けているとだんだんその気になってくるのです。そんなふうにして、それほど勞せずPTAの役員も決まってしまう。



当日のファシリテーショングラフィックより

そこで、申し上げたいことは、学校に使われるのではない。自分自身が楽しいことを学校でやっつけていこう。学校教育と社会教育、または地域社会と一緒にやれるところをきちっと探していこう。これを学社融合といいますが、この融合できるところをきちっと探していこうというのがねらいです。

「モ・ス・パ」にお父さんの出番がある

実は、学校の教員がすごく大変な時代です。日本の小中学校教諭66万人の平均年齢が43歳で、高齢化しているのです。小学校だけでみると、女性が7割、男性が3割です。しかも男性のうちの約7割が、校長とか管理職なのです。つまり、この業界は、男女共同参画社会になってないのです。希少な業界という感じがします。

つまり、日本全国の小学校だけに限れば、ほとんどの担任は、平均43歳で女性である。そうすると、苦手な分野というのが明らかになってきます。モノづくりが難しいです。スポーツ系が大変です。我々がいままで、「先生、うちの子どもはサッカーが得意なのだからサッカークラブを続けてください」と要求ばかりやってきたのですけれど、サッカークラブなんかできるわけがないです。2時間のサッカーを先生だけでどうやってやるのか。そこに気がつくわけです。つまり、スポーツ系が結構大変そう。それから、パソコンも、あっても5割の先生が教えられない。少しずつ教えらる先生は増えてきますが、3つの分野、つまりモノづくりとスポーツ系とパソコン系が現実には大変だと。これを「モ・ス・パ」といいますが、これが現状の、特に小学校では大変である。

この3分野は、比較的男性が得意なのです。だから、お父さんたちを上手に乗せて、先生だけでは大変なんだってよ。モノづくりをしようよ。スポーツを子どもと一緒にやろうよ。パソコンも大変らしいよ。そんなふうにしていけば、当然先生も喜びながら地域の子どもの授業が充実し、結果的に地域社会全体の生涯学習・コミュニティづくりになっていく。その拠点が学校なのだと思います。

最後に21世紀の学校像を私なりにまとめてみると、1番目が、住む人も働く人誰でもが、いつでも学べる「生涯学習のまちづくり」に寄与する学校。2番目が、住む人も働く人もが、安心して安全な「ノーマライゼーションのまちづくり」に寄与する学校。この2つが21世紀の学校像と思っております。

司会 岸さん、どうもありがとうございました。

＜全体討論＞

コーディネーター：木下 勇
" : 奈須 正裕
ファシリテーショングラフィック：町田万里子
" : 細田 洋子

もっと父親が参画するには

木下 まず今日の本題に近いご意見から紹介して、議論していきたいと思います。小金小学校の西郡さんから、「お父さんたちに学校にもっとかかわってほしいのですが、なかなか難しいです。教職員の立場で父親の参画を企てるのは、どうすればよいでしょうか」という質問です。小暮さんからは、「秋津コミュニティでのお話が聞きたくて参加しました。父親が作り上げていった本物の学社融合だと思いました。学校側からの動きを探りたいと思っています」というご意見です。

関連して、先生と地域とのかかわり方ということで後藤さんから、「中学校1年生の総合学習テーマとして地域にかかわっています。先生方を資料調査から地域そのものへのかかわりへ導くヒントをお願いします」ということです。また「秋津小の取組みについて、初めはどのようにアプローチしたのでしょうか。学校などはそんなに受け入れやすいと思えないのですが」という質問もあります。茂木さんから「市内のほかの小学校では、どんな様子なのでしょう」という質問です。これには学校一般の壁という問題も、背景にあると思います。

榎さんから、「秋津コミュニティのメンバーが固定的で、新しい人は入りにくいと感じますが、どのようにお考えですか」という質問があります。榎さんご自身が、秋津小学校にかかわっておられて、自分のお子さんも通っておられますので、中の事情に詳しい方です。内情にはいろいろとそういうことがあるかと思えます。

以上 続けて紹介しましたが、西郡さんからの質問の、父親参加を一生懸命頑張っている先生の立場としては、実は私も隣の学区ですが、西郡さんなどと一緒に「引前（びきまえ）クラブ」というのを、地元の小金でやっております。もう4年ぐらやってはいますが、かかわる先生はいつも同じメンバーで、地域のメンバーもまだ固定的です。そういう中で今日の本題である、もっと父親が参画するにはどうしたらいいか、ということを中心にしていきたいと思います。その中には教師も学校側も、もっといろいろ参画するにはどうしたらいいかという質問もあります。まず岸さんからお願いします。

岸 ほかの学校はどうですかというご質問ですが、ほかの学校は学社融合をやっていません。その1つには、教育委員会が認識していないということがあると思いま

す。市内には16の小学校があるのですが、1番校とか2番校というのがあるようで、秋津小学校は15番目なので、ですから校長先生として赴任される方は、校長会では下から2番目なので、秋津でやっていることをほかの校長先生に、なかなか話しにくいという雰囲気があるようです。しかしコミュニティ・スクール指定になったものですから、いまは県の教育委員会も秋津のコミュニティ・スクール指定をバックアップしようということで、運営委員会というものがつくられました。県から3人、習志野市教育委員会から3人、秋津小から4人、地域から私を含めて3人が出ています。県のほうが柔らかいです。時々参加する文部官僚も柔軟ですね。折角研究指定になっているのだから、いままでの秋津の成果を大いに活かしていこうと言っています。しかし、市の教育委員会の方の中には、秋津菌をもっと増やそうとしているのかと危惧されるようで、なかなか面白くなっています。

それから新しい人が入りにくい雰囲気があるけれど、という榎さんご質問ですが、私が会長のおときは、新しい人を発掘することと伝達ということ、非常に丁寧にやってきました。初めて来た人が2回目にどうやって登場するかという工夫を、随分しました。しかし去年の6月から顧問に退いているものですから、特に私は口出ししません。悩んで大きく育つと思っているので、いい意味で突っばねています。

しかしサークルは40近くあります。年間1万3,000人がコミュニティ・ルームを利用していますので、具体的な学社融合はもうやめようがありませんから、基本的にはそのまま育てていくのだらうと思っています。新人発掘については、先ほどお配りした中の「子縁を通して仲よくしましょう！ - 秋津コミュニティ説明」というチラシを、毎年入学式のときにPTAのお誘い案内と同時に配付しています。特に強調しているのは、「特にお父さんにはお勧めいたします。長い人生、地域の仲間ができると、2倍にも3倍にも楽しさが広がります。秋津はそんなまちです」ということで、お誘いしております。

学校側からの発信という方法については、実は今日、私たちの研究会の仲間、鎌ヶ谷市の初富小学校の校長をされている江口さんが来られています。まさに学校発信をなさっておられる方なので、お話していただくいいと思います。

子どもに見える形でかかわろう

江口 うちの学校には「おとうちゃんの会」というのが、私が着任する数年前からあります。着任当時、このおとうちゃんの会は、月1回定例日を設けてコミュニティ・ルームに集まって、そこで飲んで世間話をしてい



いう状態でした。

それで、もっと見える形にしようよ、子どもたちがかわる、そういう場をやっていこうよと私から持ちかけました。私どもの学校では夏休みの7月いっぱい、子どもたちを指導するので、その間の土日はプールが空くわけです。そこでおとうちゃんの会をお願いして、「おとうちゃんの会で、管理運営を全部やってくれないかな」と話したら、よきたというこで、おとうちゃんの会の人たちが全部責任を持って、プールを管理運営してくれました。幼児からおばあちゃんまでプールに入って、ものすごく大きな浮き輪を持ってきたりという形でやってくれたのです。お父さんたちは、ローテーションを組みながら、結構出てきてくれました。

それと、実はこれは私もどうかなと思しながら、おとうちゃんの会で、昔の運動会はテキヤさんなどがいっぱい面白かったよねという話になったのです。では校内で、お父さんがテキヤさんをやるうということになったのです。それまで会のユニフォームも何もなかったのですが、メンバーで染色の仕事をしていらっしゃる方がいて、Tシャツやのぼりを作ってくださったり、提灯みたいなものを持ってきたりして、運動会をやっている一角に、そういうものをつくりました。子どもたちにはジュースだったのですが、ビールもいんじゃないのという話になって、時間限定でお昼休み前後をはさんで、1時間半ぐらい生ビールも売ったのです。710人の子どもがいるのですが、ビールが全部で300杯以上売れました。

お互いに意見を言い合える雰囲気地域の中に

江口 うちの学校では、保護者の人たちが参画してくれる行事の後には、必ず感想文を募り、それを全部学校で印刷して、全家庭に返しています。運動会の時も全部で60通ぐらいの感想が寄せられて、その中に、子どもの学校行事のときにビールを売るとは何事だ、という意見が3つ出ました。それも全部書いて、地域の保護者に返しているのです。そしてこの後、論議が起きることを実は期待しているのです。つまり地域と学校がどうかかわるかという、その辺の限度の問題も含めて、これから論議が起きるのを、私自身は楽しみにしているのです。良いところだけではなくて、まずいなと思うことも全部出しながら、お互いに意見を言い合う雰囲気を地域の中につくっていく。またおとうちゃんの会も、自分たちだけで小じんまりまとまって、酒を食らっているだけではなくて、やはり子どもたちと具体的にかかわっていることが見えるような、そういう形でやっていきたいということで、少しずつですが、そういう面ではやっています。

そのほかにも秋津と同じように、空き教室に鎧戸を作って、土日使えるようにしてくれということで、教育委

員会に再三お願いして、やっとこの夏休みにできました。これから使い方を工夫していこうかなということでやっています。いずれにしても学校・地域を問わず誰か思い付いた所から、できる人が発信すると。限界を先に自分で想像しないで、まずはやってみようではないかと。そのことが大事なかなと思って、今やっているところです。

PTA談話室で先生と本音で話し合う

岸 最初の一步をどう踏み出したかということですが、私はPTAの役員を7年やって、やはりPとTを近づける努力をやっていきたいと思っていました。そこで会長のときに、PTA談話室というものを設けました。PTA談話室ではタブーがないということで、例えば体罰や学力問題と塾など、普通、学校の中では話しにくいことをあえてテーマにしよう。土曜日の午後なので、先生の勤務時間ではないものですから、にこにこ、にこにこしながら、「先生、今度来てよね」などと頭を下げたりして、先生にはものすごく気を遣いました。そういうことはできるだけ、本当にマメにやってきました。

そうすると先生もだいぶ柔らかくなって、本音が出てきます。例えば先生の話では、その当時、理科に「人」という単元が入ったので、性教育を意識しているころなので、「性教育について教科書にはどこから生まれるかの記述がない。何億分の1の精子と卵子が会って生まれた君は、かけがえのない1人なのだということをしっかり教えたい」とか、「相対評価から絶対評価への移行は、より個々の良さ、頑張りやを認めて評価するとの趣旨には大賛成だが、その具体化が難しい。例えばできる子はできる子なりでいいが、できない子はできないままに評価することになりかねない。また評価しないことも考えたが、高学年になると進学のこともあり、保護者が納得しないであろう」とか、「学校がいま悩んでいます。人間的に育てたいとの思いと、必ずしも許されない環境との矛盾を、どう乗り越えるか心を痛める。例えば児童会や生徒委員会に推薦されても、塾があり、通塾時間との関係で立候補ができないなど、自分の子どもと学校の子どもの感情的に違う」など、こういう本音がやはり先生からも出てくるようになります。これをまたPTA広報紙にきちんと書いて、親のほうにも理解をいただきます。

PTAの会合そのものも、運営の仕方を随分工夫しました。それまではこういうように対面方式で、役員がみんなこちらにいます。しかし同じ保護者なのに、なんでという感じがあるわけです。「何言ってもいいですよ」と言葉でいくら言っても、意見は出ません。ですから口の字にして、あえて役員はバラバラに座ろうと。司会者もその日に毎回変えていくと。ですから司会者がいる所が、何となく正面みたいにして、実際に話しやすい雰囲気づくりをしました。

どうすればお父さんは参加してくれるのか

木下 それでは今日の本題である父親の参画については、その地域の状況によって、いろいろ違うと思います。秋津のように、最初のきっかけは岸さんなどの努力があったと思いますが、だんだん変わってくると今のお話のように、PTAがコーディネーター役になり、またはPTAのOBが地域のコミュニティ活動を展開するようになります。小金の場合、PTAも結構頑張っていると思いますが、西郡さんからのご質問にも、ほかのご質問にもありますように、一般的にPTAや教師側が学校の中で、「父親参加」と言っても、そんなに簡単にはできないわけです。西郡さんご本人に、もう少し言っていたら、汐見さんからお話いただけたらと思います。



西郡 松戸の小金小学校で教員をやっております。木下先生と、「引前（びきまえ）倶楽部」というのをやっています。PTAというか、保護者の協力にはとても厚いものがあり、一生懸命やっていたのですが、お父さんがこういう企画に参画すると

いうところまで、もう一歩なかなか至らないというのが現状です。何とかならないかということで呼びかけてはいるのですが、地域の昔からの方々が参加するとか。結局PTAの役員の場合、会長さんは男の人ですが、それ以外の方はお母さん方になってしまいますので、どうしてもお父さんの出てくる場が少ないのです。先生方の中には、無理矢理そういう場を設けて、お父さんと一緒に何かをやらうとするのですが、年に1回集まって、それでおしまいとか、顔はつながっているけれど、忙しくて会う機会がないという感じになってしまっています。何か起爆剤を持ってくれば、うまく続くのかなと思うのですが、なかなかうまくいかないところがあります。

また初富小の校長先生のように、ご理解のある校長先生ばかりではありません。いろいろな校長先生がいらっしゃるって、地域やPTAに対しての考え方もそれぞれあります。そういう中で教職員の立場としては、やはり地域の方、特にお父さんが入ってくると、すごく良いというところがありますので、どうすればいいかなというのが率直にあったわけです。

木下 では汐見さん、よろしいでしょうか。

汐見 率直に言って、父親が小学校や中学校のいろいろな活動に参加しながら、学校を拠点に地域づくりを進めている所は、まだそんなにないような感じがします。いつも秋津小学校が出てくるのは、ある意味でまだ十分な広がりを見せていないということだと思っています。ただ私の個人的な体験で言いますと、父親が子どもの教育や地域づくりに参加しているという点では、保育園な

どのほうがはるかに進んでいると思います。

いくつか思い付くまま言いますと、千葉県富津市にある和光保育園の例があります。ここではお父さんの活動が当たり前になっていて、昼間保育園へ行くと、暇なお父さんがうろちょろしている。それで勝手に「園長、ここに穴あけていい?」「いいよ、いいよ」と、隣の部屋に出入りできる小さな穴を勝手にあけて、子どもたちがちょろちょろ、部屋から部屋へ出入りできるようにしているわけです。「勝手にやられるんだよな」などと、園長が笑いながら言っていました。また最近では建て替えてしまいましたが、親である大工さんがしょっちゅう出入りしていて、中2階に部屋を造ったり、上り棒がついていてそれで上らなければ上れない遊び空間を作ったり、絵本だけの部屋をつくったりと、とにかくお父さん方の活動が活発なのです。

当初、どういう形で事が始まったかという、園長の仕掛けでした。父親が参加してくれないとこの園はどうしてもやっていけないのだという環境をつくれればいいというわけです。最初は、プールを造ってやりたいけれど、プールをつくる金がないからということで、土を掘ってプールをつくることにした。それで園庭に一角にかなりのスペースを取って、6月になったら、「さあ、掘ってほしい」とお父さんに呼びかけます。土日もそうですが、仕事が終わったらできるだけ早く駆け付けて、子どもの前で掘って、そこにビニールを敷いてプールを造ります。そして9月になったら、「はい、終わりました。お父さん、また埋めてください」という形で埋めてもらうのです。ですから毎年仕事は必ずあるわけです。父親たちは、ここは刑務所みたいなところなんだよなとって笑っていました。掘ったらすぐ埋める、埋めたらしばらくしてまた掘れというのを繰り返しているわけですから。でも園長は、プールを買いません。毎年仕事があるからいいんだ、というわけです。

そして「今度は子どもたちに絵本を作る、読む、そういう部屋を造りたいんだけどなあ」などと、よだれを垂らして言うと、その中の棟梁みたいな人が、「そんなもん造ってやるよ」という話になります。「でも金がないんだ」「何とかするよ」という形で、おやじ同士が何とかしてくれる。

7、8年前には、そういうおやじたちが自分たち用の場所をつくらうということで、保育園の入り口の横に校倉造りの建物を造ってしまいました。親の中の1人が指揮をして、全部親たちが造ったのです。中にはカウンターがあって、要するに飲み屋みたいなところ。学習会もできる。すると母親たちが頭にきて、なんでおやじだけでやるのだということで、母親の会というのをつくって、結局いまはそこが溜まり場になっています。全部で600万円ほどかかったそうですが、バザーで金を集め

たそうです。

このやり方は、とにかく金はないけれど、こういうものは子どもに絶対必要だということで、このお父さんは頼めそうだとすると、一人ひとり真面目に頼んで回るわけです。そうすると必ずその中心になってくれる父親が見つかって、参画してくれるわけです。そのエピソードを園便りにつくって流し、また何かないか探し続けるのが、園長の仕事です。

父親の力を本気で当てにして、真剣に頼む

汐見　そういう所は全国にたくさんあります。熊本市の阿蘇側の方向の地域に、あゆみ保育園という保育園があるのですが、ここもおもしろい。普通の園庭があるのですが、そこ地続きで畑があったのです。その畑も園の土地です。主任の先生が、子どもの遊び場所としては園庭だけではつまらないのと思って、何かログハウスで冒険のできるような建物を造ってやりたいと、やはり父親に持ちかけるわけです。すると父親たちが「それはいいけども、金はどうするんです？」となる。「金は一銭もない。何とかそれでも造りたいんだ」と言うと、「しょうがない。じゃあ、間伐材でも使ってやるか」「それはいい」ということになって、どうやったら間伐材が手に入るかということで、みんなで相談が始まるわけです。それがきっかけで、さまざまな手製の遊具が父親たちによってつくられました。山をつくり、山と移植した大きな木を冒険遊具でつないだり、野外ステージをつくったり、たき火空間を作ったりと、実におもしろい工夫が始まったのです。

ここに行くとき私も何時間でも遊んでいたいような、いろいろなモニュメントが造られています。実は、台風が来ると風で壊れてしまうそうですが、園長や主任はそれがいいといっています。壊れたからつくってくれとまた頼める分けです。そういうことが始まってから、ここでは父親がいろいろな行事の担い手になっています。これも同じですね。どうしてもお父さんがやってくれないと、子どものためにもう一歩次のことができないのだということを、やはり真面目に本気になって頼んでいるのです。それは配慮してやっているのですが、父親の力というものを本気で当てにしているわけです。

メーリングリストでお父さんたちの意見交換

汐見　全く違うパターンでは、最近の例ですが、北大の中にある保育園でおもしろい事例に出会いました。父さんたちが、メーリングリストを運営しているのです。保育園の父親のメーリングリストです。お父さん方には、保育園の行事や育児そのものにもっと加わりたいという気持は持っていて、忙しくてできないという人が多いのです。そういう人の中で何人かが、「父親だけの

メーリングリストをつくろう」と呼びかけたわけです。ただし園には内緒でやっていました。そうすると「今日、園長がこんなこと言ったけど、みんなどう思う」というのが夜入ってきて、「俺は頭にきたね」などと、いろいろ書きあうわけです。そういうことを本音でやり合うので、普段はかかわりがないけれど、帰ってきてたとえば夜10時からそれを見るのが父親の楽しみになってきているそうです。

そして「だいが意見がまとまってきたから、我々はやはり反対だということで、まとめて園に出していいですか」と言うと、「良い」とか「悪い」ということになります。そして、それまでの意見がズラッと印刷されて園に持って来られて、園長に渡す。園長は父親がそんなことしているなんて全く知らず、「何これ」と初めて見るわけです。「こんなことやっていたとは、私は知らなかった」と、もうびっくりしていました。そうやって普段メールで議論をしている人たちがときどき本当に集まる。すると、「あなたの意見は面白かった」などと、すごく盛り上がるのそうです。これは新しいやり方だと思いました。参画の仕方が、これは直接できない人でも参加できるようなやり方なんです。こういう形の民主主義って面白いですね。

熱心になってくれる中心人物を捜し、任せていく

汐見　ここからいくつかの教訓というか原則が導ける気がします。特に大事なものは、こういう形の活動をどうしても展開したいのだけれど、人材も金もないというときには、とにかく学校側や園側がこれだと思おうようなお父さんに目を付けて、それを大胆に依頼していくということです。先ほど岸さんから、コンピューターとか、物づくりとか、スポーツなどというお話がありましたね。この点では、お父さんの力を使わないと、なかなか新しいことはできないということでねばり強く本気でお願いすると、お願いしたら後は上手に任せるといことと、任せるときに、多分この人が中心になってくれそうだという人を、やはり見つけることだと思います。秋津小がうまくいったのは、岸さんと宮崎校長さんの組み合わせが良かったということもあるし、岸さんのように熱心にかかわれる人、しかもいろいろな配慮をしてやれる人がいたということが、かなり大きいと思います。でもそういう人はどこにも必ずいるはずなんです。これは一般論ですが、そういう人をうまく見つけて、ある段階では委ねていくという原則でやるしかないのではないかと思います。

木下　私も習志野市に住んでいて思ったのですが、公立では学校の中に幼稚園がありますね。私もそれにかかわって、餅つきなどをやったりするので、やはり父親が出てくる場面は、小学校に比べてあるのです。槇さんが秋津小学校にかかわったのも、公立の幼稚園に通って

いるという関係があるのかなと思うのです。習志野では幼稚園のころからお父さんたちが知り合っていて、そういう活動に慣れているということが、要素としてあるのではないですか。

岸 そうですね。習志野は人使いの荒い所で、小学校の校長が幼稚園の園長も兼ねている所が、5つぐらいあります。9年間というのは大きいですね。うちには子どもが3人いるのですが、3人とも保育園っ子でした。幼稚園を、何となく多数派に考えていて、保育園や、学童保育というのも、ほとんど眼中にないですね。ですから少数派である保育園の親たちが、「きちんと保育園にも誘いをかけてください」とか、「学童保育にも運動会のチラシを配ってください」というように配慮しないと、教育委員会ルートだけで終わってしまいます。それが地域にさまざまな人が住んでいることの良さだと思います。つまり、保育園に行っていようと、幼稚園に行っていようと、みんな地域の子どもののです。そういう考え方が学校教育のほうには、なかなかないかもしれません。ですから接着剤役は地域がしていくと。

学校側から困っていることを投げかける

木下 それから先ほどの汐見さんの話に関連して、学校側からこういうことで困っているというのを投げかけることが、大事ではないかと思うのです。お父さんたちのボランティア活動とか、ボランティアのキー概念として、金子郁容などはパルネラビリティと言っていますが、こういうことで困っているということさらけ出すと。学校というのは、どちらかと言いますとガチッとしていて、住民側から見た場合、制度や形の堅さというものがあったりしますので、かかわりの持てないことがあると思います。

愛知県額田町に、大雨河小学校という小学校があります。山深い地帯で、車で行くと同様から30分ぐらいの林業地帯です。いまの林業の状況から、子どもの数も減っています。10数人の小学校ですが、そこで「ふるさと総合学習」という総合学習をずっと展開してきておられる荻野先生が、今日来ておられます。少しお話をお願いします。

荻野 今日は汐見先生も、岸さんも、木下さんも、話をされる方はみんな髭をたくわえていらっしゃるんですね。学校の中で髭を付けている先生は、なかなかいないのです。学校という所は、だんだん堅くなるなと思っています。



文部省のほうが発想が柔らかいのではないのでしょうか。今年、全校で14人です。本当に小さな学校です。ただ額田町という所は山間の町ですが、子どもを学校の主人公にしようとか、子どもの発想を基に授業を展開してい

うということをしてきた経緯があるのです。私が教員になった30年ぐらい前から、地域に根ざして、そういう学習をやってきた伝統がありました。

先ほど汐見先生は、百姓はすべてのものをつくり出した人間とか、これは自分が発見したのだという自己肯定感というお話をされました。私たちの地域には岩月寿太郎さんという人がおります。ふるさと総合学習を展開してきた主要な方で、中学卒業後、農林業で食べてこられた方です。炭焼きかまどを自分で20も30も打って食べてきたのです。ふるさと総合学習をやってきたときに、学校の先生はすぐ設計図などと言うけれど、自分たちの生活の知恵というか、その中で学んできたものを子どもたちに伝えたいということで、本当に快くというか、自分たちがやってきたことを子どもたちに伝えていくことが、自分のやりがいというか、生きがいみたいな感じで参加してくださっているのです。

もともと最初は自然の池を造るということで、赤土を固めた池づくりでした。先ほどのピオトープみたいなものです。子どもの発想として造り出したもので、昔炭焼きかまどを造る所に水を溜めるために、赤土を打ってたたきという工法で池を造ったことがあるので教えに来てくれて、それからずっと毎年のようにかかわって来てくださいます。炭焼きかまども本格的なものを、校庭に造ってあります。また発想がすごくて、古墳を校庭に再現したり、物見櫓を造ったりしています。

だんだん大きなものになっていって、今度はログハウスを造りたいということが、子どもたちの発想の中に出てきました。では地域の間伐材を使って、ログハウスを造ろうということで取り組んできています。自分たちは子どもたちと出会った中で、本当に一生の思い出になるような実践をやりたいというところからスタートしました。それで本当にわからないことに突き当たったときに、地域の人をお願いしたわけですが、そのときに教えていただいたことで、地域の人とのつながりが生まれてきました。

逆にいままで自分たちは、子どもの実践という感じでもずっとこれを追求してきたのですが、今度は地域の人たちもその中に参加して下さることによって、地域の人自身がその中でやりがいを見つけていくと。それに過疎ですから、学校統廃合ということも、だんだんあがってきているわけですが、発想を転換して、子どもの教育をやりながら地域づくりに活かせないかというところが、いま課題になってきています。今日も、学社融合の融合というところをすごく楽しみにして来ました。

ただ融合の最初は、必ず摩擦があるということは、非常に感じています。最初はお互いの利害関係が、なかなか難しいと思います。本当にとことん付き合ってみると、やはり分かり合えるのではないのでしょうか。ログハウス

のときも、地域の顔役の人も立てなければいけないし、いろいろな思惑があったりして大変でしたが、一緒にやってきたPTAの会長さんになられた人が、「先生とこんなに深い話ができたのも、こんなことをやったからだね」ということで、本当に献身的にやってくださいました。学社融合というのは、最初の段階ではいろいろな軋轢もあると思いますが、もう一步踏み込んでやれば、やはり乗り越えられるのだなという思いでいます。「ピンチがチャンス!」とか、「悩んだほうが大きく育つ!」というような、ちょっとした面白い発想を今日は学ばせてもらったなど、そんな思いであります。

学校と地域をつなげるコーディネーター役は誰がやる?

木下 私は、農文協の『ふるさと総合学習』という本を読んで、こんなに素晴らしい教育をやっている所があるのかということで、建築学会の委員会の活動がきっかけで、大雨河小学校に、3年ぐらい前から行かせていただいて調査させていただいています。今日のテーマに関連して、私なりに受けとめたことを言いますと、PTAと、学校の先生と、親のコーディネーター役という話が出ました。

いま農村部の課題としては、過疎化や地域活性化なども絡んでいるのです。大雨河小学校も児童数がどんどん減少しているのです。ほかのいろいろな農村部でも、素晴らしい教育をしているのに廃校になってしまう、こんなに素晴らしい教育をしているのに、なぜ村は滅んでいくのかということで、過疎化の問題を考えていたのです。その辺で大雨河小学校がかかわっている住民の岩月寿太郎さんや、いろいろな人や何人かの協力者のお話を聞きしました。

先ほど固定化というお話がありました、その中で協力者が何人か固定化されてきます。その人たちは素晴らしい能力を持っているので、第2の先生ということで、困ったときをお願いするという形になっているわけです。この岩月寿太郎さんは優れた林業家でもあって、全国でいろいろな大木を切り倒すときには、頼みに来るほどのすごい職能を持っている、まさに職人なのです。しかし森林組合などのいろいろな関係で、その人は浮かび上がってしまうのです。足の引っ張り合いや妬みもあるのか、



組織のいろいろな細はわかりませんが、学校に協力して、炭焼きかまどや古墳を造ったりしていることが、地域の中で評

価されていないのです。総合学習が地域全体のものになっていないのです。そこで、その辺をいろいろ聞いたり探ったりしてみたのです。

いまのお話のように、ログハウス造りというのは、いろいろな職能が必要です。そういう中でPTAにも投げかけて、土建関係の人やいろいろな人が協力して出来上がったわけです。出来上がった完成式のときには、今回の場合は、PTAや地域の組織、森林組合など、いろいろな所を立てて、みんなの協力という形にしました。そして最後にオープンときには、岩月寿太郎さんが巨大な囲炉裏を作って持ってきて、それを置きました。そのようにいろいろないざごさはあったけれど、結構いろいろな人が協力してできた場だったのです。

その間のコーディネーター役は、荻野先生1人でした。地域の中の確執など、いろいろなことがあるわけですが、そういう中で頼み込んで、いろいろな協力関係をつくっていったわけです。ただ、そのコーディネーター役を教師がやらざるを得なかった。教務主任でクラスを持っていないからできたと言っていましたね。クラスを持って総合学習をやっていたら、そんなことはできません。一体誰がそういうコーディネーター役をやるのかというのは、学校と地域をつなげるときに、課題になっているのではないかと思います。

イギリスなどではアーバンスタディセンターとか、グラスゴウのアーキテクチャーセンターといった組織なり専門家なりがかかわった、そういうつなぎの場と組織があります。日本の場合もそういうものが必要なのか、または違う形なのかというのは、こういうことを考える上で一つの課題だと思いますので、その辺について議論したいと思います。

ほかに何かご意見なりご質問なりをいただけませんか。

地域住民にとっても学校が不可欠な存在にならないと

汐見 私のほうから質問します。岸さんたちが運動されている学社融合の中身にかかわると思いますが、いまの荻野さんのお話でも、地域にそういう人材がいなかったということで、どちらかという学校側の要求を地域の人材で満たしてもらおうという形が多いのですが、それはまだ一方向だという感じがするのです。

例えばいまの日本の社会では、社会体育は極めて不十分です。体育館や運動場は、もう1回身体をリラックスさせたり運動したりする場としては、非常に大事ですが、地域の人は必ずしも有効に使えない場になっています。仕事が終わった後に集まるなり、家族で何かをする場として、体育館を活用させてもらえないか。あるいは学校の調理室やいろいろなものを、もっと有効に活用させてもらえないか。学校の図書室をもう少し充実して、地域の図書館にしてみたらいいか。コンピューター室を開放

して親用の教室を開いてもらえないか。こういう形の要望は潜在的にはたくさんあるはずです。場合によっては中学生ぐらいになったら、親も生徒も一緒に夜の教室で学ぶ。そして親の中から授業を担当してくれる人が出てきて、入り乱れてやっているけれど、親自身は自分の再教育をしている。そういう文化拠点というか、親の自分探しの場というか、そうした場を学校は提供できるのじゃないかと思うのです。学校が地域に位置づくためにリソースを提供する。地域が学校に人材その他を提供する。そういう相互交流と相互メリットがないと、なかなか融合というようにはいかないような気がします。

総合的な学習の場合には、地域にどんな人材がいるか探すということはやっているのですが。やはりある意味で個人的な善意に依存していて、その人だけが地域から浮き上がってしまうという構造が、まだあるのではないのでしょうか。例えば地域の人に来てもらっても、いまの教育行政では交通費さえ出せないのです。ですから本当にゆとりのある善意の人しかできません。そういう限界もあって、今のところはなかなか自在な展開が難しいと思います。もう少し進むと、昔の地域教育計画ではないけれど、わが村の産業をこれからどうするか、先生に来てもらって、こういう村はどう発展させたいか、どうやったら過疎化が防げるかということ、みんなで学校へ行って勉強しようではないかということも含めてやっていく。そういうように地域住民にとって、学校が不可欠というようにならないと、という思いが私にはあるのです。そういう視点から、荻野さんに、地域の人にとっての学校というのは、本当に必要な場になっているかどうか、その辺をもうちょっとお伺いしたいのです。

おらが村のおらが学校という思い

荻野 やはり農産村の地域なものですから、学校というのは基本的にはおらが村のおらが学校という思いで、おじいちゃんやおばあちゃんは見ていると思うのです。

3年生の子が石臼で引くというと、子どもはぐちゃぐちゃにこうやって回しましたが、90歳を超えるおばあちゃんが、「昔は夜鍋仕事にやって、こうやって回したんだよ」ということを、自分のかわいい孫のために学校に来てくれる。田んぼ仕事を一貫してずっとやっていますが、所々で「これはわしの出番だ」ということで来てくださる。そういう意味では学校自身に対する信頼というか、自分たちの生まれ育ったというか、そういう場であるという思いは、まだまだあると思います。そここのところが逆に依拠できるところかなという感じです。

新しい親同士のつながりというか、若い世代のつながりというのはまだないので、そういう話合いの場が逆に生まれたとも言えるかなというところがあります。

ただ、コミュニティというか、地域の中での、こうい

うものを作っていこうという盛り上がりまではまだまだ行っておらず、そのようになっていきたいという思いではいます。

学校の統廃合は地域住民の大問題

岸 いま秋津は22年なのです。だから、児童数が340人で、最盛期の3分の1です。では、あと10年経ち、20年経ったらどうなるかということ、地域住民は予想しないと廃校になってしまうのです。教員というのはそんなことは考えていません。だから、先ほど誰でもが学べる生涯学習コミュニティの拠点のような学校にしたいとか、ノーマライゼーション、安全で安心ということは、学校の中だけが安全で安心ではなく、地域社会全体が安全でなければ学校も安全ではない。「安全で安心だから秋津で子育てしたいわ」または1度秋津から出ていったけれども、やはり子どもを育てるのだったら自分が育て、すごくいいと思える秋津小学校、秋津に1回戻って子育てしよう。それは無形の機能みたいなものですが、誰が意識するかは我々なのだと思います。

いま地方分権と言われるのですが、それをどう使うかが両刃の剣という例が出てきています。

1つの例は、新潟の例ですが、わずか5人ぐらいいた子どもの3人の家族は町に引っ越してしまい、残ったのは2人。廃校にして特別養護老人ホームに変えてしまうのです。目的替え転用ができるようになったので、学校として10年以上使っている場合にはお金を国に返さなくていい、それに行政マンが乗ってしまうわけです。村人はどう言うかということ、「子どもの声が昼間聞こえないというのは、大変寂しい、この先、この村はどうなっていくのだろうか」というのが1つです。

もう1つの例は、鳥取県に会見小学校というのがあって、平成9年ぐらいに児童数が6人にまで減ってきて、平成14年度には児童数がゼロになってしまうということ、村人が予想するわけです。ゼロになるということは、100年近く続いた学校が廃校になってしまうのです。そこで村人はどうするかというと、村を動かして学校の敷地の横に住宅を建ててしまうのです。3LDKで2台入る駐車場付きで、会見第2小学校に児童を入学させる家族については、家賃がたったの2万円です。米子から車で1時間ぐらいの所なので、6戸建てで、すぐ埋まってしまったのです。それに気を良くして翌年さらに4戸建てたのです。私は去年の夏休みに行ったのですが、10戸建てで、児童数が19人にまで増えたのです。ですから、平成19年まではもつわけ、学校存続委員会を住民が作るのですが、10戸建てるのは教育委員会の金ではなく、自治省から金を引っ張って来る。2億円かかるのですが、村自体は2,000万円しか出さないのです、つまり、行政内融合という発想です。

何を言いたいかという、子どもたちを増やして、秋津の学校を続けるのは俺たちなのだ。だから、何人ぐらいまでに減ってきたら教育委員会が統廃合をするだろうということを事前に予測していれば、大体できるだろうと思っています。極端な発想としては、7,500人住民がいるのですから、秋津村で独立しようとか、そうしたら教育長だって私たちが選べるし、校長だって私たちが選べる、そういうものの見方はあり得るのです。つまり、国にお任せしないと。実際に江戸時代は寺子屋を持って、自分たちで子どもたちを育てていたわけですから、その主体性という考え方がすごく大切な気がします。

双方にメリットがあるから無償が原則

岸 もう一つ追加ですが、学社融合の4原則があって、初めから双方にメリットがあること。つまり、子どもの授業であると同時に、大人にとっても社会教育になるということ。または笑顔という喜びが持てる。または大正琴のおばあちゃんからすれば、発表場所が得られるというメリットもあります。両方にメリットがあることしかやらない。双方で授業(カリキュラム)を作ること。それから無償であるという原則があります。つまり、社会人にもメリットがあるのだから、謝礼は払いませんという姿勢をきちんとするということです。学校を越えて交通を使う場合は別ですが、自分の小学校区や中学校区で大人はお金を求めません。逆に言うと、お金をもらってしまうと、もらい慣れしてしまいます。つまり、自治意識の育たない住民をつくってしまうので、行政は金を出さないほうがいいと私は思っています。

4番目が、双方で評価するということです。一応この4原則を持ってやっています。ですから、今までの発想と随分違います。金是要らない。金をもらうと金がなくなったら行政というのはビジネス(仕事)を継続しないのです。最初からもらわないで自分たちでやっていくことがまちづくりにもつながっていく。行政の発想と生活者の発想を行ったり来たりするというものの見方がものすごく大切な気がします。

そういう点で教員のことを考えれば、自分の勤務校のことだけではなく、自分の生活エリアの小学校や中学校がどうなっているのか。もしお子さんが通っているとすると、その学校がどうなっているのか、避難所としてちゃんとなっているのかどうかを66万人の小中学校の先生が生活者の発想を地域で持って、学校教育に臨めば、また随分変わってくるかなという気がします。

木下 ありがとうございます。その辺はまちづくりというか、地域側からの学校とのかかわりにも絡みますので、次は「親の側からコミュニティづくりに参加するには」という話でいくつか紹介させていただきます。

岩瀬さんから、「お父さんがかかわるコミュニティづ

くりの第一歩にアドバイスください。再来年、1年育休を取る予定なので、それをきっかけにして動き出したいと思っています」とあります。ご自分で動き出そうとされているようです。

岩瀬 小学校で教員をしております。今年は1年学校を休んで、来年1年復帰するのですが、子どもが生まれたので、再来年1年間育休を取ろうと思っています。本当に生まれただけで、汐見さんが新聞に書かれていたので里帰りさせずに家でいま苦労しています。私が再来年1年育休に入るつもりなのと、上の子どもがちょうど小学校に上がるので、具体的に自分も教員としての自分を1回棄てて、地域にいる1人の父親としてどのように動いていこうかということのヒントが欲しくて今日来ました。先ほどの話でたくさんヒントが出てきたので、具体的に行動を考えてみようと思います。とりあえずは来年は保育園のPTAに入ろうかと思い始めました。

木下 川越さんのほうの地域の現状の質問も含めながら、今度はお父さんの側から学校の敷居が高いなどという話も一般にあります。特に秋津は、行政からもほかの学校からも特殊化されます。そのようなことを含めて、岩瀬さんのこともありますので、汐見さんから少しアドバイスのなことでもお願いいたします。

地域の人とつながりをもって子育てを

汐見 男性で1年育休を取るという決意をされた方というのは、大変珍しくて、頑張っしてほしいと思います。私も随分育児をやって、公園デビューとかいろいろやりましたが、とても耐えられないということがよく分かりました。「失業中の男が何しにきたのよ」といった感じでジロツとにらまれ、あれは大変なことだと思ったのです。

ともかく子どもを育てるときは隣近所の人とできるだけ親しくするという原則で、近所に町のニュースステーションみたいな電気屋さんがあったので、そこに入り浸っていました。私は保育園に預けていましたが、当時はまだ大学院の学生で家庭教師などアルバイトをしていて、週に3日ぐらいは夜の12時、1時になってしまうのです。私の妻は保母をやっていたのですが、熱心な保育園でしたので、夜の11時になることが週に3、4日あって、どうしても保育園に迎えにいけない日が2日、3日できるので、誰か迎えに行ってくれないかなと、地域に頼みに行くのです。そうすると、「探してあげるわよ」という感じで探してくれた人がいて、出会いがあったということで、どんどん人脈が広がっていき、今まで生きています。この間もその息子さんの結婚式の仲人を頼まれました。

あの子どうしている、あの子どうしていると。地域というのはこんなものだなとつくづく思っています。とにかく困ったときはいろいろの人に頼みに行く。育休取るのはいいのですが、意気込んでやり過ぎて、全部私がや

るのだとしてしまうことの結果、結局自分が地域の人間としてなかなか位置付かないことになります。育休取ったら、そのエネルギーを地域の人とのつながりを作るのに費やせるぐらいのことが大事だという気がします。

たぶんそこでいろいろな人と出会って、そういう人たちと子どもを育てるのにもっと面白くやれないか、楽しくやれないかという知恵を出し合うようなことは、是非やったらいいのではないかと思います。

私はしばらくしてマンションに引っ越したのですが、そのマンションで子育てをやっている親たちがいっぱいいたので、つなげようということで、お母さんたちがベチャクチャしているところに割り込んでいって、定期的に金曜日の夜だけは子どもが寝静まったらどこかに集まるということをやっていたのです。1つのマンションだけで300軒あって、それが4、5棟あったので、1,000軒くらいあって相当なものなのです。自分のマンションだけでも子育て中がいっぱいいたものですから、気の合う同士が、あの人も呼ぼう、この人も呼ぼうということで十数人になったのです。で、毎週10人以上が10時過ぎると三々五々集まってきて、ベチャクチャと3時、4時まで喋って、そろそろ寝ないと、となるわけです。そうやっている、いろいろな情報交換ができるだけではなく、「うちの子がお宅へ泊りにいきたいというのだけれども、いい」とか言って、土曜日になると、子どもはマンション中旅行しているわけです。土日に子どもがいない日は親は自由行動で、普段できないことをやる。

私の親父が危篤のときには、1週間くらい子ども3人をみてくれるなどというのは当たり前で、連休があると、みんなで子どもを連れどこかに行こうということで、車を借りてはどこかへ行くとか、そういうのをよくしました。大森に住んでいたので、大森不良主婦クラブなんていってましたが、男もかなり参加していました。

そういうつながりのようなものを作って、いまでも連絡をとり合ったりしています。私は保育園の親の会もあったし、地域のそれもあったということで重層的にやって、もう少し地域で何かできないかということで、その中の何人かのお母さんが子どもたちのために人形づくりを始めた人もいました。エネルギーを地域の人にとまかくつなげる、どこかに拠点を作るということに使ったらいいのではないかと思います。

お父さんたちが肩書きを外して本音で語り合う

汐見 お父さんを何とか地域に学校にというときに、面白かったのは、多摩市の保育園で、200人の子どもがいる大規模園ですが、その親の会の活動がとても面白かった。やはりお父さんが中心になっていて、最近、父親全員にアンケートをとりました。何を書かせるかというと、自分の妻に対する不満を書かせるのです。今度は

母親に、夫に対する不満を書いてくれとアンケートをとり、まとまってくると、いよいよご対決という形で「みんな集まってくれ」とやる。行ってみましたが、最初に報告したのがシングルファーザーで、子どもを4人抱えて頑張っているお父さんでした。大手新聞社のデスクも話をしていました。みなそれなりの苦労話を持っているわけです。そのあとアンケートの結果を報告して、これに基づいて言いたいことを言い合いしようという形で、普段出てこれないお父さんが、これはちょっと出てよようかなという気持ちになるような企画をいっぱい考える。

そのとき付き合った人ですごく面白いことを言った人がいて、髪の毛が長くて束ねた40歳過ぎの人で、私はこういう組織でこのようにワアワアすることは虫酸が走るほど嫌いだった。そういう所だけには行きたくないと思っていた。しかし、子どもを預けてみて、そういう活動に少しずつ嫌々ながら巻き込まれていって、最初は斜に構えたのだが、初めてここで肩書など一切通用しなくて自分の生身の人間を出さなければいけない立場に追込まれたんですね。「男で泣いている人がいるんだよね」とか、「仕事がうまくいかない」とか、「こんなことを言ってもしょうがないのだが、ここで言うしかない」などということを繰り返しているうちに、「あっ、こういう組織って、意外といいんじゃない」と初めて思って、自分の鎧がやっと取れたというのです。そうすると、「はっきり言いますが、先生、はまりました。私はいまこの活動に生きがいを感じて、とうとう仕事を辞めました」と言うのです。「何やってるの」と言ったら、「父母の会専従ですかね」と。母ちゃんに食べさせてもらっているというのですが、そこまでやるかと思ったのです。お父さんが肩書を外して、子どものため自分のため家族のため地域のためなどと考えていることは、それを自分の新しい生きがいにしている人がいるということは、私にとっては感動的でした。

そういう父母の会の活動に入って、そこで上手に男の本音が語れるというか、そういう場を上手に作っていくことも是非やる。それはそのあと小学校に入ったときには、大体みんなPTA活動を担っている舞台になっているのです。そういう工夫が大事だという気がします。

新しいまちでも、古いまちでもやる気があればできる

木下 川越さんから、「秋津の話はいつも元気をもたらえます。しかし、地元に戻ると、学校の敷居はまだ高く感じます。学校との接点は、普通の親はなかなか持たないでしょう。親の中に地域を意識する人は少ないのが現実です。特に母親は我が子がいちばんで、地域活動を続けていく人は希のようです。父親は仕事がいちばんです。中途半端な歴史のある学校なのですが、何か新しいことをやろうとすると、PTA、OB、地域の圧

力がかなりかかります。秋津は地域の歴史が浅いからできたのかと思いますが、いかがでしょう。

岸 秋津は東京湾の埋立て地にできたのです。習志野市そのものは内陸部はものすごく古いわけですが、秋津の方は新しい町ですから、例えば、公民館がほしい、図書館がほしいとか、内陸部のほうからすると、要求が高すぎる、しかも新参加者という時代があったそうです。

秋津は、水洗トイレですから、最初から下水道率100%なのです。ところが、内陸部はいまだに55%ぐらいです。私たちは生活基盤そのものが基盤整備できていないのに新参加者が何考えているのだという感じなのです。これはすごく重要なことで、水俣の吉本哲朗さんなどは、風の人と土の人、つまり古い人と新しい人の折り合いをつけて風土が生まれてくるのだ。そのことは秋津のコミュニティの運動論としてもものすごく重要視しています。

というのは、実は秋津全体は新しいが、7,500人の中の頭は土の人も風の人もいるのです。だからまち全体は新しいと表現できるかもしれないが、そこで具体的に新しいものを作っていくには、秋津の中での風の人と土の人の折り合いを付けていくこと。そういう点では新しいまちだからできた、古いまちだからできないとは私は全く考えておらず、やる気があるかないかという感じです。

防犯、防災拠点としての学校

木下 質問が2、3残っています。岸さんの安全、安心について、菊地さんから、「安全、安心を考えると、防災ノーマライゼーションだけでなく、防犯もあると思います。防犯の問題は、だんだんひたくりやいろいろなのが、また中高生もそういう中の加害者になったりということがありますが、学校の先生の、そして学校の先生のモノづくり、スポーツ、パソコンとありましたが、学校を拠点としたお父さんの出番として、非常時の馬鹿力も期待されてよいと思います。そういう秋津小と地域との連携の辺りを具体的に、誰が昼のまちを守るのか、誰が身体の不自由な人を災害時に助けるのか。防犯の面などで、どのように学校と地域がつながっているのか聞いてよろしいですか。池田小の事件のあとは、結構秋津コミュニティも取り上げられていました。しかし、防犯の面はいかがですか。」

岸 学校に防災倉庫が設置してあるのですが、7つの町会がそれぞれ年に1回防災訓練をやっていました。ですが、防災訓練を町会でやるときに集まる人は、その年度の役員と後援者だけ。365日、24時間いつ起こるか分からないですから、高齢化率はまだまだ低い地域ですが、それでも独居老人、高齢者夫婦、そういった方たちを搬出するためには若いお父さんたちが、できるだけ寄れる地域にしたいというのが町会の悩みでした。

一方、お父さんたちに聞いてみると、キャンプをやっ

たことがないというお父さんが結構いたのです。そこで6年前から防災避災訓練を兼ねた1泊キャンプを実施することになりました。町会のほうは若い人と知り合いたい、お父さんたちは学校でキャンプができる。そういうときに校長が実に上手なのですが、「父と子どもだけの参加」と言うのです。そのように言うと、どうしてもお母さんが、「お母さんは参加できないんですか」と言ってきますから、「ああ、そう、あなたたち参加したいの、じゃあ、手伝いをさせてあげよう」と。そうでなければ何でもかんでもお母さんが出てきてしまうのです。あえて父子というように振っていくという1つの方法です。

秋津小は池田小の事件のあとも、いつでも授業参観オーケーです。昇降口を入ると名前を書くノートがあって、それに名前を書いて、「参観者」という名札を付けければ、いつでも学校の中に入っていける。そうすると、田舎から、おじいちゃんやおばあちゃんが来たときに、孫を見たい、じゃあ、学校へ行こうと、実際に授業に入っているわけです。それが長い歴史の中で少しずつそうってきて、去年から完全にオープンという経営方針になったわけです。

地域のおっさん・おばちゃんが金八先生をやるべき

岸 防犯のことですが、私の2番目の、いま21歳の息子が中学校のときに、かつあげ未遂事件というのがありました。たまたま家に戻ったときに息子が電話をかけていて、「お前、何やってるんだ」と言ったら、先週サッカーとバスケの友達10人と隣の町のお祭りに行った。そうしたら卒業生に呼び止められて、「10人いるから1人1万円ずつ持ってこい」と言われた。なぜかという、その上にさらにブー太郎がいて喧嘩をして前歯を折った。その治療費が10万円かかるからと下に下に降ろすのです。その10人の1人に息子がなっていて、先輩から1週間後ということで呼び出され、何人かが公園の公衆電話に集まって、「岸、来い」と電話をしているわけです。「お前どうするんだ」と言ったら、「行かない」というのです。「友達どうするのだ」と言うと、「うーん」とか言っているのです。「それじゃあ、駄目だ、お父さん行くから、どこにいるんだ」「分からないけど、公衆電話だ」と。

自転車で乗って出掛けようとしたのですが、後にPTA会長をやる種田さんという方が家族でたまたま夕涼みをしていて、「岸さん、どうしたんだ」と言われ、「こうこうなのだ」「よし、じゃあ、俺も行く」と、奥さんに「あと誰さんと誰々さんに電話をしてくれ」と頼み、3人の自転車隊になって、あちこちの公衆電話を駆け回るわけですが見付けることができなくて、1時間ぐらい回って家に帰ってきたのです。そうしたら息子が清々した顔をしているのです。「どうしたんだ」と言ったら、

「お父さんたちが動き出したのを先輩が知って、今日はいいからと帰された」と言うのです。そういう話をコミュニティのおじさんたちにしたら、「おお、金八先生だな」と言うわけです。「何かあったら俺たちにも連絡してくれよ」と。そういう人が10人は下らないと思います。つまり、地域の子どもはみんなの子どもだという意識が私たちにはあるかなと思います。

コンビニエンスストアの前で10時ぐらいにいかにも中坊(中学生のこと)がたむろしている。中にはタバコを吸っているのもいる。それを見た地域の人が中学校に翌日、「お宅の生徒がこうだった」と電話をしたりするのです。ご丁寧に中学校には生徒指導部などがあるものですから、「すみません、ビシビシ指導します」など言うのです。これはおかしい。そうでなければ先生が30人、40人、場合によっては全校生徒を駆けずり回って夜中まで1人でやれるわけがない。つまり、地域のおっさんとかおばちゃんが金八先生をやるべきなのだ。そのためにはとにかく集う。入口をたくさん作って、社会的にも力を持っているお父さん自身の居場所を学校に作る。地域の生活者であるお父さんたちは引っ越しをしませんから、結果的に地域全体が安全になれば、そこで働く教職員にも間違いなくメリットがあるわけです。5日制になって休みの日が増えたわけですから、地域から先生の自宅に電話がなければうれしいと思うのです。だから、学校を開くというのは、そういう点でも教員にとっても大切なことなのだと感じています。

木下 まだ紹介していない、ご意見。高橋さんから「韓国、中国とも少子高齢化が進んでいますが、21世紀の学校像は何でしょうか」という難しいのがあります。

学校に親が関わりにくいのは教育内容の違いから

奈須 時間がないので1つだけ申し上げます。先ほど汐見さんが、保育園はやれてるではないかと言われましたが、私も自分の息子について保育園はすごくやれていました。保育園を出て3年生になりますが、保育園のOB会があって、いまでもその人たちと旅行に行ったり、遊びに行ったりしています。そういうコミュニティが私たちにとっても支えになっていて、親もそれで育てられているというのは、保育園や幼稚園で結構あります。

学校に行くとなぜないのだろうというのは大問題で、1つは付き合いの形式の問題ではなく、そこでやっている教育内容の問題があると思います。幼稚園や保育園というのは生活ということがそのまま教育の対象であると同時に教育の内容です。生活者としてよく育ていく、その中で言語とか対人関係とか表現に力を付けていこうというカリキュラムになっていると思います。だから、幼稚園や保育園の園長さんも困っているから助けてくれと言うのです。なぜかという、それが教育内容だから

です。小学校に入った途端に、最初に汐見先生がお話くださった教養主義で啓蒙主義できて、どこかの本の中にある知識を教える、日本中同じことをやるのが学校だというのがあって、そこで生活とか地域ということと、もともと離れたことをやってきたのです。そういったことが実はすごく大事なことはないかと思えます。

地域の生活者としての生き方を学ぶ総合的な学習

奈須 今日のもう1つのモチーフである総合的な学習というのは、まさに地域を対象として生活を内容とする学習です。生活者としての生き方、在り方を問い直して、汐見先生の最初の言い方をすれば、生活者としてしゃんとしてくる子どもを育てるという全く違ったカリキュラム、つまり教育内容の編成原理を持っている。だから地域なのだと思うのです。何かその辺に向けて地域との関係を教育の内容やカリキュラムということとつなげた話題でご指摘をいただければ、今日のお父さんたちの子育て、まち育てと、それを学校ではやりにくかったのですが、これからやれるぞ、それがまた21世紀の新たな学校像ということなのだろうと思います。総合的な学習ということに少し焦点を絞った場合、付き合いの可能性がどう変わるのか、また、保育園でやってきたことが、どう活かせるのかということの筋もっとはっきりして行くのではないかと思います。

木下 最後にお2人に一言ずつ言っていたらこうと思います。いまの奈須さんのご意見も踏まえて一言ずつ言い足りなかったことも含めてお願いします。

21世紀の学校は親も関わりながら自ら学べる場に

汐見 いま奈須さんがおっしゃったことは、まったくそのとおりだと思います。保育園、学童などは生活をする力、そのこと自体が教育テーマになっていますし、親の生活は全部もろに子どもに出てきます。例えば、保育士さんが親と話すときも子どものある部分だけを話すわけではなく、子どもの全体についていつも見ているわけです。そういう意味では親も生活そのものの全部をかけたかわらざるを得ないというところがあります。

ところが、学校は頭の一部だけをやる場所で、しかも敷居がずっと高くなって、カリキュラムも一応全部決まっているし、評価の仕方も決まっています、親はそれを外から眺めるしかないという感じになり、だんだん疎遠になっていきます。そういう学校の目標とか教育内容の在り方全体に親がかかわっていくことをそもそも前提としていない。そういうことが、学校にかかわれない原因になっているのだと思います。

21世紀の学校像を考えたときに、私はいまのような親にとって敷居がうんと低くなって、自分たちもそこで学べるし、教師も地域の親とかかわりながら自分で成長し

ていけるような、深い出会いがいろいろできるような場に衣替えしていくことを目指すしかないと思っています。

戦後 50 何年間の中で学校が比較的地域から信頼されていて、生徒たちからも思い出深い所だと思われたのは 1950 年代だと思っています。貧しくても、宿直などいろいろあって、私の母親などは忙しかったので先生の宿直のときしか会いに行けず、夜中の 10 時、11 時までよく喋っていたのに付き合わされたのを覚えています。そこに学校というか先生に対する深い信頼があって、しかも生活全体を出さなければやっていけなかったわけで、だからこそ信頼があった。状況はちがいますが、学校はやはりそういう場所であってほしいわけです。私は「学校はこうあらねばならない」と一律にモデルをつくるべきではないと思っており、それぞれの地域がうちの学校はこんな学校をつくろうという個性を競い合うことだと思います。でも学校という所は、社会が息苦しくなってきたときには、逆にそこに喜びが感じられるような場所に変えたいという意思をそこで語り合えるとか、夢が語り合えるような場所に変えていこうという原点だけは共有しておく必要があるような気がしています。

親と教師が協力して子どもたちの教育をつくっていく

汐見 私は個人的には文明と文化を 21 世紀ははっきり分けて考えてみたらどうかということを提案しています。文化というのはカルチャーという言葉の元に戻って考えたい。カルチャーというのは「カルティベート」という言葉の名詞形で翻訳語です。カルティベートというのは、農業用語で土を耕しているいろいろな有用なものを育てるという意味です。カルチャーというのは、手で耕し、苦勞してでもそこにできるだけ価値あるものを育てていこうという営み、あるいはその結果できたものを指します。アグリ・カルチャーというのは農業という意味です。ですから、苦勞しながら、例えば、家庭で、今日はお父ちゃんが早く帰ってきたから、みんなで一緒に食事をしよう。ついでにみんなで一緒に作ろうと言い、できて、食べておいしいねおいしいねというのは、さり気

ないことですが、カルチャーです。そこに手作りで苦勞しながら、でもできるだけ価値あるものを創造しようとしている。これが最大のカルチャーだと思います。自分の住む所、自分が住む街を苦勞しながら、できるだけみんなが明るく集えるような町にしようと呼びかけながら苦勞するのもカルチャーです。まちで会ったときに、あちこちにベンチが置いてあって、「おい、ちょっと座って話さない」とかできる。まちの中にお茶を飲めるような場所がいっぱいあって、店などもどこも前にテーブルが置いてあり、「ここでお茶を飲んでいってください」というような感じになっている。そういう場をみんなで作りたいね、と努力するのもカルチャーなんです。

文明というのは、制度化されたようなものだったり、国家がそれを採用したものだったりするわけです。それが必要なのですが、家庭の中、個人の関係の中に文明がズケズケ入ってきたときには、我々は一緒に苦勞しながら作っていく達成感とか、そこに通う感情の交流などがだんだん体験できなくなり、生きるということの手応えをなくしていくような気がするのです。だから、21 世紀は学校はもう一度文化というものにこだわっていこう。手作りで、例えば食事を作ることはこんなに面白いことだったのかとか、自分たちの住んでいる所がどういう問題を抱え、どう変えていったら素敵な場所になるのかをみんなで考えていこうとか、公園がこんな遊び場所だったら、例えば、焚き火できるような公園がほしい、木に登れるような公園がほしい、草摘みができる公園がほしいと子どもたちが夢を出しながら、みんなでワイワイやって実際に作ろう。このワイワイとやって手作りでやっていくのが文化なのです。そういうことが学校の中で語り合える。文化というものを 1 つのキーワードにし、そこで本物の文化と出会うことによって自分を探していくという自分探しをもう 1 つのキーワードとし、足元の文化をいろいろな地域とつなげていく。決まったカリキュラムというよりも、親と先生が協力して、アイデアと知恵を出し合いながら子どもたちの教育を作っていくような学校をイメージしています。



地域の人、誰でもとかわれる学社融合

岸 先ほど 私なりの21世紀の学校像というのは2つあって、1つは生涯学習のまちづくりに寄与する学校像、もう1つは安全で安心なノーマライゼーション、コミュニティづくりに寄与する学校とあり、その手法としては地域の人、誰でもとかわれる学社融合と申し上げたつもりです。その延長で考えると、10年後の納税者を作ることが公教育だと思います。2005年に日本は高齢化率が19%になるそうです。19%というのは世界中でもありません。でも秋津は安心です。大正琴のおばあちゃん、将棋のおじいちゃんたちが年金で生活していたとしても、かけがえのない秋津の楽しい子どもたちが元気でいてくれるなら、少しでも税金を払ってもいいだろうと、きつと思ってくれると思います。

では、いまの小学校6年生が8~10年経つと納税者になるわけです。そのときに「俺のじいさん、ばあさんでもないのに、なんで俺の金を使うんだ」という子どもが生まれてはまずいわけです。だから、学校は公教育の継続性を確保するのだ。つまり、未来の納税者をいまついているのだ。そのことは教員だけではまず無理です。

そこで総合的な学習の話ですが、年間105時間も教科書がない。「やっと教員の願いが花開いたね」と私は思いました。教職員運動というのは、自分たちの学びを子どもたちへの学びの自主編成権獲得運動だったはず。それなのにという感じが2、3年していました。では、なぜ国は「生きる力」と言うのか、文部省の文言を読んでも非常に抽象的でよく分かりません。私みたいに具体

的に読み替えると、生きるためにはご飯を食べなければいけない、生きるためには健康な体力でなければいけない、この2つです。この2つの命題の足元を見たときに、食べられる力が日本にあるのかないのか。農林水産省のホームページを見たら、自給率がたったの38%、つまり、輸入がなければ62%は餓死する国なのです。では、どこから輸入させてもらっているのか。国際理解学習も必然だし、文部省が例示している4つの分野です。では、食を確保させていただく国に今までのように金で物だけを輸入してくる国でいいのかどうか。当然その環境も再生産できるような国に、そういう考えを持つ子どもたちに育ててもらわないと地球規模では生きられないのです。環境学習の必然性がそこにあります。

つまり、押し付けられた問題ではないのです。日本の国家が本当に存続するのかもしれないのか、そういう命題が現実にあって、さまざまな学びをする必然性がまさにいまあると思います。

何をやるか、「学校や地域の特性に応じて」と『学習指導要領』の「総則」に書いてあるわけですから、当事者である教職員が真摯に学校や地域の特性をどう考え、どう授業化していくのか。そして、「ここをお手伝いいただきたい」「ここをもっと充実させたいのだ」ということを保護者と地域にアピールすれば、「よし、ひと肌脱ぐぜ」という人はまだまだたくさんいると思います。そのことのきっかけになるような豊かな総合的な学習づくりに挑戦していただきたいと思います。

木下 延藤先生に最後のまとめをお願いいたします。

【まとめ】

何のための総合的な学習か - 21世紀の学校・地域像 -



(財)住宅総合研究財団住教育委員会委員長
延藤安弘(千葉大学工学部教授)

何のための総合的な学習か

お2人のお話と、皆さんの発話と応答の中で、主題に向かって触発される思いが、お互いの心の中に広がったと思います。今後備えてキーワードを束ねてみたいと思います。

1つは、何のための総合的な学習かということです。これからの学校・地域像というのは何やねんという基本

的問いかけが全体にわたって響いておりました。前半の汐見さんのお話の中にキーワードがたくさんありました。大事なキーワードをすくい上げて、4行詩風にまとめてみます。

自尊感情 1つは、知識を押し付けられるのではなく、自尊の感情を高めるというセルフリスpekトな人間を育てていくことが、これから大事なのだ。一人ひとりが何

を目指して生きるんやという自分の価値観を発見するというこの自尊の感情について、とても大事なことが語られていました。

反省応変 2番目に自己は他者との間の距離感を測りながら、リフレクティブに反省しつつ、状況の変化が次から次へと起こるわけですが、その状況の変化に臨機応変に対応するという、変化に応じるしなやかな判断力と行動力が、子どもたちの間にどのように浸透していくのか。併せて、いいものを目指す、「何がほんまもんなんや」という感動の心と呼び覚ます日々が学校内外にどのように広がっていくのか。

憧憬志向 子どもの心の中に憧れの風景を掻き立てていく。そして、「何をを目指すんや」という志の世界を膨らませていく。憧憬に対する志をたゆまず上昇させていくというキーワードである。

協働表現 もう1つ、知識は1人の中に閉じ込められたものは人類史の中になかった。すべての知識はコラボレイティブな他者との協働において、そして1+1が2ではなく、3にも4にも5にも10にもなるという協働とともに、併せてそれは何を意味するかという、心の中にたゆまず内から込み上げてくる思いを外に表現する、インプレッションをエクスプレッションするという、表現の体験が、これからの教育で待たれているのではないか。このような4つのキーワードを実践する具体的方法として、総合的な学習は提起されているという歴史的な価値観、方法論の転換を、この4つのキーワードに束ねて語られたように思います。

「漢詩は縦に書くもんや」という批判の眼差しが会場にみなぎっておりますので、縦にも読んでみます。

情変向現 心の状況の変化に対して、たゆまず現実の世界に向き合う。

感応志表 状況の変化にたゆまず感応力のあるセンシティブティの高い志をたゆまず外に向かって現していく。

尊省景働 省ることを尊びながら、ともに働く景色を押し広げていく。

自反憧協 自己の中に閉じこもるのではなく、自己をたゆまず反省しながら、むしろ力を合わせることによって新しい出来事が生まれ、自己はそこから生まれるのではないかという憧れの心を生み出していく。

なぜか横のキーワードは縦にも見事にキーワードとして成り立っていると同時に、斜めにも読めるのではないか。心の変化に応じながら、たゆまずともに動くランドスケープを心の中に思い描くという「情応景協」という新しいキーワードとともに、自ら省みつつ、たゆまず新しい現れを志すという「自省志現」、世界は未来に拓か

れている、自己は未来に拓かれているという方向がみえてきます。21世紀の学校、子ども教育の方向は縦、横、斜めの自由世界やというコンセプトが今日の語り合いの中に、汐見さんの発話を起点にしながら実ってきたように思います。

お父さんが輝くためのキーワード

2つめに、このコンセプトを実現するためのキーワードが、対話の合間にくっついて響いていました。

アートフルな楽しい制作・表現 1つは、大工仕事ができるお父ちゃんはちょっとしたみんなの集いの空間を作ってくれるとか、あるいは大正琴の上手なおばあちゃんが、子どもたちに音楽の楽しさを伝えてくれるとか、さまざまな制作・表現のアートフルな楽しさ。

トータルな運動・活動

秋津は「トータルスポーツ」という言葉が出ていましたが、女の先生ばかりではサッカーができません。また、お父さんたちの持っているパソコンという技を伝える活動、トータルな運動、活動を。

チャンネルの多様なカルチャーづくり

一人ひとりはそのような活動を伝えるチャンネルになる。文化と文明は分けながら、巨大な技術、制度的文明に抗い越えていくのは一人ひとりの心の中に

蓄えられている何をを目指すかという心と、その振舞いの表れとしてのカルチャーであり、一人ひとりはそのようなチャンネルの多様なカルチャーづくりの担い手になれるのではないか。

思い出を育む それは一体何をもたらすかという、愛知県荻野先生は、子どもにとって生涯心にとまる思い出を育むことが教育現場で目指すいちばん大事な1つなのだ。子どもが一生あの学校で、あの地域で、子ども時代にあんな生き物との出会いや、あんなおもしろいおっちゃんとの出会いがあったことを思い出として心に刻んでいく。

一生の宝としての記憶と希望 創造的な活動の分かち合いというのは、たゆまず未来に向かって、こっちに向いて生きていこうという希望の眼差しを子どもたちの中に伝えていくのではないか。

でっかい悩みがみんなを伸ばす 生きるというのは記憶と希望を蓄えていくことなんや。学校の教育、遊びの経験の中で、子どもたちの生涯の宝としての記憶と希望の蓄積とともに、「実際やっていくのはええ格好しいだけではうまいこといかへん、メチャ大きい悩みがある。このでっかい悩みがあるほうがしんどい状況を超えて、みんなを伸ばすんや」「活動なんて大嫌い、組織なんて大嫌い、地域でのかかわりなんてくそくらえ」と言っていたお父さんが「こんなおもしろい男の本音が語れる現場は

自尊感情 反省応変 憧憬志向 協働表現

ない。俺は自分の仕事を放ってでも子どもの記憶とか希望を活かすための場にかかわることに喜びを見出したんや。当初は悩みやトラブルがあったけど、トラブルはエネルギーになるんや、対立は力なんや」と。そういうしなやかな、したたかな心が、やっているうちにお父さんたちの心の中に育まれていく。

「要領知」(専門知)も「養生知」(生活知) 「要領知」という新しい言葉を今日は聞きましたが、専門知というコンピューターを操作できる、お金の計算ができる、さまざまな政策・制度について熟知しているという要領知、専門知も大事だが、要領知に対して「養生知」を子どもたちに伝授する。言い換えるならば、それは生活知ではないか。生きる力を育む養生知というのは、いろいろな出来事を、いろいろな楽しいイベントを仕組むための段取りする力、そして次から次へとやっていく楽しさを楽しむ力、あんなおもしろいことやれるお父さんに僕もなってみいたいという憧れる力、真似る力、そういう生きる力としての養生知。普通は養生と言うと、健康を回復するだけですが、ここでは要領に対して養生というちょっぴり韻を踏んでいるということは、すでに皆さん方お気付きのことだろうと思います。

そんなキーワードを7つ挙げてみましたが、それぞれのキーワードの頭文字を取って、全体に無理矢理に束ねているという感がいたしますが、「あー、とーちゃん、おいでよ」と。これを少し意味付けをしますならば、学校、地域を耕す、カルチャーすることに、アートすることに喜びを、楽しさも、そして生きがいを感じるお父さん、学校、地域をアートするお父さん、学校、地域をたゆまず状況の中で楽しく耕し続けることに生きがいを見い出

あー アートフルな楽しい制作・表現
とー トータルな運動・活動を
ちゃん チャンネルの多様なカルチャーづくり
おい 思い出づくり
い 一生の宝としての記憶と希望
で でっかい悩みがみんなを伸ばす
よ 「要領知」(専門知)も「養生知」(生活知)
… 学校・地域をアートするお父さん

し、子どももそれによって育まれるが、大人も育まれる。むしろ子どものための総合的な学習というよりも大人自身が変身し、大人自身が変わる。大人が変わらないことには子どもは変わらへん。私たち自身がどのように変わるかということに向けてのメッセージが全体の話し合いの背後に通奏低音のように響いていたように思います。

「秋津菌」の秘密はアートするお父ちゃんではないかなと思いました。愛知県や千葉県やさまざまな地域の経験もそれぞれに特殊の状況にありながら、実は普遍的なチャンネルにつながる重要なキーワードをはらんでいたのではないか。全体の議論の内容を十分反映しているとはとても思えませんが、今後の皆さん方の実践活動につながっていただければ幸いです。ありがとうございました。

木下 ありがとうございます。延藤先生の語呂合わせも、今回はちょっと苦しくて、「ああ、とうちゃん」と。それだけお父さんたちを巻き込むのは難しいのですが、いろいろな方向性が見えたかと思います。どうもありがとうございました。

住・まちづくりフォーラムかわら版 15 ©
発行日 2003年4月11日(非売品)
(財)住教育委員会=延藤安弘、小澤紀美子、木下勇、町田万里子、
細田洋子、奈須正裕
(事務局)永田一雄、平井なか、岡崎愛子
発行人 峰政 克義
発行所 財団法人 住宅総合研究財団
〒156-0055 世田谷区船橋4-29-8
TEL 03-3484-5381 FAX 03-3484-5794
URL: <http://www.jusoken.or.jp>
E-mail: jusoken@mxj.mesh.ne.jp

